

# ことばの世界

愛知県立大学  
高等言語教育研究所  
年報



2009(平成21)年3月

愛知県立大学 高等言語教育研究所

## ◆◆◆ 目 次 ◆◆◆

高等言語教育研究所について	3
高等言語教育研究所ウェブページ	5
研究会開催記録	6
新・県大ファンファーレ参加行事	7
世界のあいうえお表	8
多言語競演レシテーション大会	12
講演会共催	16
英語部門活動報告	宮浦 国江
全学英語教育の構築と英語空間創設の取り組み	19
本学英語教育一体系化・リソース化・可視化の試み	27
(参考) 平成 21 年度からの新県立大学全学英語教育	33
実践報告	
「専門分野スペイン語教育における教授者の役割 —愛知県立大学「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」の経験から—」	
	糸魚川美樹 …… 39
研究ノート	
「スペイン語アルファベット表に見る語彙」	
	堀田 英夫 …… 53
研究員の業績一覧	

# 愛知県立大学 高等言語教育研究所について

愛知県立大学 高等言語教育研究所とは、愛知県立大学学則第6条第2項の規定に基づいて、外国語学部を基礎として設置された研究所で、愛知県立大学研究所規程（平成20年4月1日施行）に定められた基本事項に基づき運営されます。

言語教育を中心とする分野において、外国語学部の内外における共同研究の推進を図り、当該研究の成果を学内で活用するとともに、広く社会に還元することを目的としています。

## 1. 背景

言語は文化の根幹をなすものであり、現代の地域、日本、世界で求められている多文化共生社会の実現のためには、外国語（及び外国語としての日本語）の教育研究が不可欠です。愛知県立大学外国語学部及び文学部英文学科は、高度で実用的な外国語の運用能力習得をその教育の基幹としていて、各学科においてカリキュラムや教授法に工夫・改善を重ね、現在に至っています。この特色は21年度学部学科再編後の新カリキュラムにおいても継承し、更に充実させるべきものと考えています。この時期に全学的な横断的共同研究所を構築し運営を開始することにより、各学科の実績を共有化・可視化することで協働態勢を作り、大学院国際文化研究科の教育研究への継続も含め、大学における一層効果的な言語教育の体系化・合理化を実現することを目指します。

また、外国語学部各学科及び文学部英文学科は、全学教育の外国語科目についても責任を負っており、この「高等言語教育研究所」を通じた活動は、全学外国語教育の改善・体系化・効率化にも寄与するものです。

さらに、日本語教員課程における日本語教育実習としての定住外国人への日本語指導のような地域貢献も実施されてきています。文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラムに採択されて実施しているようにスペイン語に加えて、ブラジル・ポルトガル語の教育も急務です。日本およびこの地域が直面する多文化共生社会の実現に資する教育と研究をさらに進めるためにも、これら活動も含めて情報や経験を学内外で共有できるようにする必要があります。

## 2. 概要(内容)

言語研究、文化・社会研究も含む学際的な研究として、外国語としての言語教育についての研究を促進し、本学での言語教育の達成レベルの向上、効率化をめざすため、以下の活動を行う。

従来の「言語研究会」（外国語学部教員並びに卒業生により毎年開催）を発展させ、非常勤講師も含む外国語科目担当者が集まり、研究発表からなる「言語教育研究会」を定期的で開催する。時に他の資金によって外部講師を招く公開講演会とし、また言語教育・言語研究を専門とする大学院生も含めた研究会とする。

本学専任の各教員やグループ（あるいは学外研究者との共同研究）によって行われている言語教育に関する研究についての情報及び成果の収集と共有化を図る。

言語教育に関する研究の例としては、授業編成(カリキュラム)、教材、シラバス、テキスト編纂、教授法、学習法、CALL・AV 機器活用法、能力測定法、外部検定試験利用法、他大学での先進的な外国語教育、海外協定大学語学研修プログラムについての検証などが想

定され、広くは、言語教育の基礎となる言語、文化・社会研究も含み得る。毎年の研究成果を一覧として報告書に掲載する。

本学の各学科専攻言語科目群のデータベース作成、リソース化に着手する。これは、新カリキュラム実施の際に、各学科専攻言語科目群のレベル別目標の明文化、シラバスの整備とウェブ上での公開、教材開発、教育法改善に繋がる作業である。

授業で使用した教材(テキスト、プリント、音声テープ、DVD 等)については、できる限り現物を本研究所の室に保管し、教員間で自由に閲覧できるようにし、今後の教材開発、非常勤講師への提案等に資するようにする。データベースは、外国語授業で使用した教材等を、科目別、段階別、対象年次別等で検索できるようにする。

### 3. 組織 2008(平成20)年度

#### 研究員

- 1) 一般教育及び専門の外国語科目を担当する外国語学部専任教員。
- 2) 言語教育研究、言語研究、文学・文化研究に従事する外国語学部専任教員。
- 3) 文学部英文学科専任教員で、前項 1)、2)に該当する者を、文学部長の同意を得て、研究員とする。
- 4) 研究員は、英語教育部門、初習外国語部門、日本語教育部門の3部門のいずれかに所属し部門ごとに研究を遂行する。ただし、部門間の共同研究または研究員が部門を越えて研究活動を遂行することを妨げるものではない。

#### 研究所会議 構成員

研究所長	堀田英夫
外国語学部長	日置雅子
教育研究審議会委員	大野誠
[英語教育部門]	宮浦国江、中村不二夫
[初習外国語部門]	鶴殿倫次
[日本語教育部門]	東弘子

#### 運営会議 構成員 (五十音順)

石野好一(予算、研究所室)  
櫻井健  
堀田英夫  
宮浦国江(英語部門プロジェクト)  
森田久司(研究会・講演会)  
吉池孝一(広報・報告書)

# 高等言語教育研究所ウェブページ

◇ 学内外向けページ

<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/gengoken/>

◇ 学内向けページ (学内のみ閲覧可能)

<http://info.for.aichi-pu.ac.jp/gengoken/>

学内外向けページ (2009年1月26日のもの)



## 研究会開催記録

### 第1回 言語教育研究会

日程：2008年8月7日木曜 午後2時より午後5時まで

会場：学術文化交流センター2階 小ホール

#### 第1部 研究発表

森田久司「To不定詞と動名詞の使い分け：メガフェブスダから進歩したか？」

宮浦国江「本学英語教育体系化・リソース化・可視化の試み」

#### 第2部 座談会

「愛知県立大学における外国語教育と高等言語教育研究所の役割」

### 第2回 言語教育研究会

日程：2008年10月28日火曜 午後1時より午後5時まで(新県大ファンファーレ期間中)

会場：愛知県立大学 学術文化交流センター2階 小ホール

#### 研究発表

糸魚川美樹「愛知県立大学『医療分野ポルトガル語・スペイン語講座』からみたスペイン語教育」

堀田英夫「地域コミュニケーション支援のための特定領域スペイン語教育」

森田久司「生成文法の言語モデルの特異性およびその根拠 - 日本語WH疑問文の一考察 -」

劉 乃華「教室における中国語文法教育のプログラム」(通訳 竹越孝)

長沼圭一「英語とフランス語における国籍を表すコピュラ文について」

### 第3回 言語教育研究会 (予定)

日程：2009年3月5日金曜 午後1時より午後5時まで

会場：愛知県立大学 外国語学部棟3階会議室 E305

#### 研究発表

小柳公代「うそを言わないパスカルの用いただましの言説テクニック (仮題)」

北尾泰幸「英語分裂文における多重焦点について」

宮浦国江「認知言語学と英語教育(1) 放射状カテゴリーを中心に」

大森裕実「国際英語の視点と EFL 環境 -Nativelikeness との相克関係か相即相入関係か- (仮題)」

## 新・県大ファンファーレ参加行事



「新大学発足という歴史的出来事を機会に、本学の伝統とパワーアップする新大学の魅力を大胆に発信し、広く県内外に県大の存在をアピールする」、「非日常的なイベントを一挙に展開することによって、学生の知性と感性に刺激を与え、学ぶ意欲と生きる力を引き出すことによって、大学全体の活性化を図る」、「準備過程と一週間の行事を通して、教員・職員・学生の連帯を強め、新しい大学の出発への私たちの心構えを作る」という目的でもって2008年10月27日から11月5日まで開催された「新・県大ファンファーレ」に高等言語教育研究所として、3つの企画で参加しました。

- ◇ 第2回 言語教育研究会 10月28日 13:00～17:00、学術文化交流センター小ホール
- ◇ ポスター展示 世界のあいうえお表 10月28日から11月5日まで、講義棟(H棟)一階ロビー
- ◇ 多言語競演レシテーション大会 11月2日 10:00～13:00、学術文化交流センター小ホール



# 世界のあいうえお表

## 1. ポスター展示「世界のあいうえお表」企画 趣旨

幼児や児童の文字教育のために各国で市販されている絵のついている文字表を各国から収集し、これをポスターとして展示することによって、愛知県立大学学生、訪れた一般の方、それに高校生に世界の言語と文化の一端を視覚で体感してもらおう。同時に本学での多彩な外国語教育の存在をアピールする。

### 1 背景

外国語教育・外国語学習において、文字教育や文字を覚えることも大きな位置を占める。幼児や児童が、文字を覚えるのに、絵と結びつけて覚える方法がある。文字が絵から派生したことを考えると、それは一つの有効な手段である。文字とともに掲げられた絵は、その言語が用いられる土地の文化や自然など風物を反映しているものもある。

本学には、英語、ドイツ語、アイスランド語、フランス語、スペイン語、カタロニア語、ポルトガル語、ラテン語、ギリシャ語、ロシア語、中国語、韓国朝鮮語、タイ語、日本語の授業が開講されていて、また、世界各地をフィールドとした研究者がいるので、世界各地の言語の絵がついた文字表を収集することができる状況にある。

本学の古代文字資料館では、古代文字資料の収集と研究の経験があり、その協力を得て、今後、収集した文字表によって、世界各地での文字教育方法について研究する。

### 2 事業の概要

幼児や児童の文字教育のために各国で市販されている絵のついている文字表を各国から収集し、これをポスターとして展示する。また、日本ではあまり目にしない文字の場合、その文字の仕組みや成立、その文字を使う言語などの概説をまとめ小冊子にする。

### 3 本事業の実施による効果

学外に対しては、本学の外国語教育・研究への取り組みを周知することで、学生募集へ効果、地域の理解が期待される。学内に対しては、学生の世界への関心を高め、勉学の意欲を高めることができる。



## II. 2008年7月2日発信全教員宛協力依頼メール文

-----  
件名: 県大公開展示企画世界のあいうえお表協力依頼  
日付: Wed, 2 Jul 2008 17:33:26 +0900 (JST)

愛知県立大学教員各位 (BCCで全員に送信しています)

県立大すべて大公開 (仮称) 参加展示企画  
『世界のあいうえお表』へのご協力をお願い

高等言語教育研究所 堀田英夫

「県立大すべて大公開」参加展示企画として、古代文字資料館の協力を得て、世界の文字教育資料の収集と展示を高等言語教育研究所で構想しました。

幼児や児童の文字教育のために各国で市販されている絵のついている文字表と文字練習帳 (できるなら文字の書き順が分かるものがよい) を入手し、文字のしくみや成立史などの研究発表を加え、学内に展示するという企画です。

絵入り文字表と文字練習帳の入手につきまして、ご協力賜りたくメールしています。

お手元にそのような資料がありましたらお貸しいただきたく、あるいは譲っていただきたくお願いします。また、近く海外に出かけられる先生におかれましては、現地にてそのような文字表の入手を賜りたくお願いいたします。

担当の吉池孝一 高等言語教育研究所運営委員までご連絡ください。

現在、古代文字資料館に以下の資料がありますが、同じ文字の資料であっても、それぞれに特徴がありますのでダブっても価値あると思われます。時代や作成者が異なれば、違いあることが予測されますので、入手にご協力下さい。

- ・インドのデーバナーガリー文字・ヒンディー語の文字表と練習帳
- ・ラオスのラオ文字・ラオ語の文字表と練習帳
- ・タイのタイ文字・タイ語の文字表と練習帳
- ・日本の平仮名・日本語の文字表と練習帳
- ・イギリスのラテン文字・英語の文字表と練習帳

他に、個人のところに

- ・スペインの絵入スペイン語文字(アルファベット)帳
- ・中国の絵入「漢語音字母」表

があります。

-----

## III. 企画実施後の報告 (古代文字資料館のホームページより転載)

### 世界の「あいうえお表」の展示

過日 (10月28日から11月5日まで)、愛知県立大学の一階ロビーで各種文字表の展示があった。これは本学の高等言語教育研究所が主催し、古代文字資料館が協力して行われたものである。比較的短い収集の期間であったが、学生や教員の協力のもと、ぞくぞくと(?)、世界各地より絵入りの文字表(あいうえお表)が集まった。これは、現地の子供たちが文字を学ぶ際に使うものである。集めてみて、類似した文字表が世界の各地にあることに驚いた。



集めた文字表を系統ごとにまとめると次のようになる。

■ラテン文字の系統

1. 英語アルファベット (イタリア製)
2. スペイン語アルファベット (スペイン)
3. カタルーニャ語アルファベット (スペイン)

4. ウズベク語アルファベット (ウズベキスタン)
  5. 中国語ピンイン字母 (中国)
  - インド文字の系統
  6. ヒンディー語デーバナーガリー文字 (インド)
  7. タイ語タイ文字 (タイ)
  8. ラオ語ラオ文字 (ラオス)
  - 漢字の系統
  9. ひらがな (日本)
  10. 漢字筆画表 (中国) \*文字表ではないが参考として
  - ソグド文字の系統
  11. モンゴル文字 (内蒙古)
  - 創製された文字
  12. ハングル (韓国)
- [2008.11.14 吉池孝一]

# 多言語競演レシテーション大会

## 1. 企画趣意

本学における多彩な外国語教育の実践を学内外に知らせるとともに、英語以外の言語にふれる機会の少ない高校生や一般の人びとに、さまざまな言語の響きと各言語による文化・文学の一端を味わってもらおう。また、学生には、暗唱を通して当該言語の学習の一部とし、かつ、有名な作品を味わう機会を与え、他学科どうし刺激しあい学ぶ意欲を高める。

### 1 背景

高等言語教育研究所が設立され、本学外国語学部＋文学部英文学科の多言語・多文化という特性を学内外にアピールしやすい体制が整いつつある。近隣の高校に広報活動を行い、本学取り組みを知ってもらおう。また大会出場者に記念品を授与することは、学生の学習意欲を高め、積極的参加を促すことにつながると考える。

### 2 企画の概要

日時:11月2日(日)10:00～13:00

会場:学術文化交流センター小ホール

- ・外国語学部学生と英文学科生の学習言語で、その言語の有名な(代表的な)詩や戯曲のせりふの一節を暗唱し、聴衆による投票で優秀者を選ぶ。
- ・持ち時間:1件につき5分。その間、関連した絵や写真を投影する。
- ・聴衆には、事前にその和訳と背景など書いたものを印刷物で配布しておく。
- ・参加募集内容:

第1部:外国語学部専門外国語1年生(フランス、スペイン、ドイツ、中国)、および一般教育科目外国語開講科目(ロシア語、ポルトガル語)、外国語学部開講科目(カタロニア語、アイスランド語、タイ語など)

第2部:外国語学部専門外国語2年生以上(フランス、スペイン、ドイツ、中国)、英語:英米学科1名、英文学科1名、留学生による日本語。

### 3 本企画の実施による効果

- ・学生にとっては、外国語学習の一部であり、かつ語学に意欲的に取り組む動機付けとなる。
- ・大会に出場できなかった学生にとっても、選ばれた学生の暗唱から刺激を受け、語学に対する意欲を高めることができる。

- ・学生、教員にとって、専門以外の言語にふれる良い機会となる
- ・高校生や一般の方に対し、本学の宣伝効果が期待できる。

今年度の企画実施の実績によっては、来年度以降も継続し、本学における語学教育をアピールする毎年恒例の行事とすることを検討する。またその場合、他大学学生の参加も呼びかけることの是非についても検討したい。

## II. 参加呼びかけ掲示ポスター

高等言語教育研究所主催 多言語競演レシテーション大会開催！

10月27日～11月5日の「県大のすべて大公開（仮称）」・大学祭期間中に、高等言語教育研究所主催で「多言語競演レシテーション大会」が行われます。

英米学科・英文学科、その他外国語学部、その他本学で学べる外国語、留学生の日本語から各1名が、3分程度の暗唱を競い合い、優秀者を決めます。

日時：11月2日（日）午前中

会場：学術文化交流センター小ホール

内容

- ・本学の授業で学生が学んでいる言語で、その言語の有名な(代表的な)詩や戯曲のせりふの一節を暗唱し、聴衆による投票で優秀者を選ぶ。
- ・持ち時間：1件につき5分。その間、関連した絵や写真を投影する。
- ・聴衆には、事前にその和訳と背景など書いたものを印刷物で配布しておく。
- ・参加募集内容：各学科専攻外国語1年生の部、2年生の部・英米学科・英文学科は、各1名。学科専攻外国語5言語以外に、本学開講科目。

当日出場者全員に参加賞

各部門最優秀賞・優秀賞・特別賞受賞者には、賞状と副賞の授与

詳細は、下記の学科・言語担当者に問い合わせてください。

英米学科：森田

英文学科：伊里

フランス学科 1年生の部：原                      2年生以上の部：原

スペイン学科 1年生の部：糸魚川                      2年生以上の部：堀田・糸魚川

ドイツ学科 1年生の部：桜井                      2年生以上の部：桜井

中国学科 1年生の部：竹越                      2年生以上の部：鶴殿

ロシア語：加藤（外国学部共通グループ）

ポルトガル語：高阪（外国学部共通グループ）

なお、当日参加はできません。また、学科・言語によっては、すでに代表が決まっているところもあります。

### III. プログラム

## 多言語競演レシテーション大会

愛知県立大学で学べる様々な言語(英語・フランス語・スペイン語・ドイツ語・中国語・ロシア語・ポルトガル語、留学生による日本語)での暗唱大会です。日本語訳や解説も配布されます。聴衆の方にも、優秀賞の選考に加わってもらいます。

それぞれの言語の独特の音とリズムに耳を傾けてみませんか。

日時: 11月2日(日)10:00~13:00

場所:愛知県立大学学術文化交流センター2階 小ホール

**プログラム 参加者・演題 (エントリー順 各部門内の順序は当日決定の予定です)**

#### 第1部(学習歴1年目)

**中国語:** 山田伸一郎、牧 祥子 [中国学科1年]

孟洪然「春暁」、王維「送元二使安西(元二の安西に使用するを送る)」、朱熹「偶成」

**ポルトガル語:** 筒井由佳 [英文学科1年]

História da Imigração Japonesa no Brasil”(ブラジルに渡った日本人移民の歴史)

**フランス語:** 加藤健太郎 [フランス学科1年]

Antoine de Saint-Exupéry “Le Petit Prince” I (星の王子さま I)

**スペイン語:** 平見成子 [スペイン学科1年]

Federico García Lorca “Romance sonámbulo” (フェデリコ・ガルシア・ロルカ「夢遊病者のロマンセ」)

**ドイツ語:** 多田穂菜美 [ドイツ学科1年]

Johann Christoph Friedrich von Schiller “Der Handschuh”(フリードリヒ・フォン・シラー「手袋」)

**カタロニア語:** 赤塚由 [スペイン学科3年]

Mercè Rodoreda “La plaça del diamant”(メルセ・ルドゥレダ「ダイヤモンド広場」)

#### 第2部(学習歴2年目以上)

**中国語:** 林本裕斗、林美樹 [中国学科]

杜甫「春望」、張継「柳橋夜泊」

**日本語:** フェッターゼン ロミー ナディーン [特別聴講生]

飯倉晴武「招き猫-猫が商売繁盛に結びつくのはなぜか」(飯倉晴武 2003『日本人のしきたり』(青春出版社)より)

**英語(英米学科):** 伊木ロドリゴ、庫ヶ入利久

A scene from “Dead Poets Society”(『今を生きる』の1シーンより)

**フランス語:** 井手一輝 [フランス学科]

Antoine de Saint-Exupéry “Le Petit Prince” II(星の王子さま II)

**スペイン語:** 木場悠 [スペイン学科]

Pablo Neruda “Alturas de Macchu Picchu”(パブロ・ネルーダ「マチュピチュの頂き」)

**ドイツ語:** 田地芙美香 [ドイツ学科]

Johann Wolfgang von Goethe “Der Zauberlehrling”(ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの「魔法使いの弟子」)

**英語(英文学科):** 小石瞳

Severn Suzuki “A Plea for our Planet”

#### IV. 結果報告

### 高等言語教育研究所主催 多言語競演レシテーション大会 結果

11月2日開催の多言語競演レシテーション大会には多数参加いただきありがとうございました。  
会場からの投票で最優秀賞と優秀賞を選んでいただきました。

#### 第1部(学習歴1年目)

##### **最優秀賞**

スペイン語: 平見成子 [スペイン学科1年]

Federico García Lorca "Romance sonámbulo" (フェデリコ・ガルシア・ロルカ「夢遊病者のロマンセ」)

##### **優秀賞**

中国語: 山田伸一郎、牧 祥子 [中国学科1年]

孟洪然「春暁」、王維「送元二使安西(元二の安西に使用するを送る)」、朱熹「偶成」

#### 第2部(学習歴2年目以上)

##### **最優秀賞**

フランス語: 井手一輝 望月彩香 [フランス学科]

Antoine de Saint-Exupéry "Le Petit Prince" II (星の王子さま II)

##### **優秀賞**

英語(英米学科): 伊木ロドリゴ、庫ヶ入利久

A scene from "Dead Poets Society" (『今を生きる』の1シーンより)

審査委員会により、以下の二つの賞の受賞者が選考されました。

##### **学長賞**

英語(英文学科): 小石瞳

Severn Suzuki "A Plea for our Planet"

##### **外国語学部長賞**

ポルトガル語: 筒井由佳 [英文学科1年]

"História da Imigração Japonesa no Brasil" (ブラジルに渡った日本人移民の歴史)



## 講演会共催

講演 「ICT を活用した英語教育 ―Nintendo DS と e-Learning」

〈講師〉大阪電気通信大学工学部英語教育研究センター 柏原郁子 准教授

### 講演概要

英語教育に e-Learning を導入することによって、学生個人のニーズにあった学習環境を提供することが可能となる。教育効果をあげるには、e-Learning を講義とうまく関係させて、学生へコーチングを行うことが鍵といえるだろう。講演では、大阪電気通信大学での ICT (Information and Communication Technology) を活用した英語教育の具体的な事例を報告するとともに、Nintendo DS を用いた新しい英語教育の試みについて紹介する。

〈日時〉 平成21年1月28日(水) 15:00～17:00

〈場所〉 愛知県立大学学術文化交流センター小ホール

〈主催〉 地域連携センター文理連携研究会  
高等言語教育研究所、情報科学共同研究所

〈対象〉 教職員および学生

# 平成 20 年度 高等言語教育研究所英語部門活動報告

外国語学部英米学科 宮浦 国江

全学英語教育の構築と英語空間創設の取り組み

本学英語教育一体系化・リソース化・可視化の試み

(参考) 平成 21 年度からの新県立大学全学英語教育

# 全学英语教育の構築と英語空間創設の取り組み

英米学科 宮浦 国江

## 1. はじめに

平成 19 年度から始めた英文学科・英米学科の教員による本学英语教育拡充の試みは、今年度、次のような課題に取り組んだ。

- (1) 最重要課題として、平成 21 年度からの全学英语教育体制づくり
- (2) それに関連して、英語能力テストの試行・検討・決定
- (3) 教育 GP 申請「探究力・発信力を英語卒論に結実させる教育」
- (4) 英語科目担当教員の研修
- (5) 学内英語空間創設の試み…多様な英語学習支援
  - 英語コミュニケーション能力テスト(CASEC キャセック)全学受験
  - 英語連続セミナー
  - 多言語競演レシテーション大会
  - 「日米学生テレビ会議」
  - 「英語をすらすら読もう」英語多読のすすめ

以下で、それぞれの取り組みについて報告する。

## 2. 全学英语教育の構築

英語教育共同研究室(E406)での定期的ミーティング、英文学科・英米学科合同会議、外国語科目作業部会、教育研究委員会、英語科目担当者の集い等の議論を経て、別添資料「平成 21 年度からの新県立大学全学英语教育」のように、新体制が構築された。

要点として、次の点が上げられる。

- a. プレイスメント・テストによる習熟度別クラス編成
- b. ①グループ(外国語学部)<月・木>と②グループ(日本文化学部・教育福祉学部・看護学部・情報科学部)<火・金>に分割

以上 2 点により、習熟度や関心に応じた授業を展開しやすい環境が整えられた。

- c. 週 2 コマの授業の特徴づけ

English for Academic Studies と English for Interaction

d. English for Interaction における洋書系テキスト推奨

e. English for Interaction における評価

学期はじめのプレイスメント・テスト同様に、学期末に統一テストを実施し、その成績を 50%、教授者による評価を 50%とする。(検討は継続)

### 3. 英語コミュニケーション能力テスト(CASEC キャセック)利用

全学英語教育の新体制づくりの議論の中で、クラス分けをいかに行うかは重要な課題であった。入学式から授業開始までの短い期間に、混乱なくかつ教育効果の上がる形で、5学部8学科計570人をクラス分けするための方策を昨年度から引き続き検討し、多様な観点からCASEC利用を決定した。その際、開発協力校としてCASEC導入検討制度を利用した(2008年7月～2009年7月、84万円)。他のテストとの比較については、19年度報告書を参照されたい。

本年度は、7月に「英語インターミディエイトⅠ」「英語インターミディエイトⅡ」のクラスを通じて、またポスター等により全学一斉受験を呼びかけた。結果全学で454名が受験し、平均点は577.5点(1,000点満点、TOEIC換算で568.9点)であった。

7月一斉受験結果を、21年度からの習熟度別クラス編成の基礎資料とする予定であったが、受験者数が少なかったため、10月に再度全学受験を呼びかけた。今回は、「英語インターミディエイトⅠ」「英語インターミディエイトⅡ」全クラス履修者に受験を義務づけた。その結果、1151名が受験し、平均点は549.8点であった。この受験結果の分析に基づき、①グループ、②グループ内での「上級」「標準」「基礎」レベルのクラス数を決定した。

公的には、外国語科目作業部会(2008年10月20日)において平成21年4月にCASECによるプレイスメント・テスト実施が決まり、教育検討委員会(2008年12月3日)でも了承され、さらに、22年度以降も継続してCASECによるプレイスメント・テストが保証されるよう今後大学経常予算措置がなされるべきであるとの方向性が確認された。

### 4. 教育GP申請

昨年度来の英語教育拡充の試みを母胎として、平成20年度に新設された教育GPに「探究力・発信力を英語卒論に結実させる教育」を申請した。

#### 取り組みの概要

英米学科は、1966年の創設以来、高度な英語運用能力と英米文化圏の文化や社会への理解を備えた国際的視野をもつ有為の人材の育成を目的とし、すべて英語で行う段階的英語教育プログラムを基盤に、イギリス地域・アメリカ地域・イギリス文学と文化・アメリカの文学と文化・英語学/英語教育の5分野の専門知識を深め、その総まとめとして英語による

卒業論文を、一貫して必修として課してきた。各英語科目では、英語コミュニケーション能力を段階的に高めていくだけでなく、常にテーマについて深く探求し、自分の見解を構成し、発信する力の養成にも力点を置いている。卒論のコンテンツを支える5分野の専門科目においても、体系的な科目構成により知識・理解を着実に深化させるだけでなく、英語の情報収集能力を活かしつつ、自らの設定した課題に向けて自律的探求力をつけ、レポートにまとめる訓練を重ねて、3年次後期から卒業論文作成を視野に入れた指導を行っている。このように、英語教育と専門教育に連結性をもたせた教育実践によって、英語卒業論文を、学士課程教育の学習成果として機能させてきた。

また英米学科は、平成21年度に予定されている文学部英文学科との統合により、本学の三層の英語教育(英米学科専門英語科目、外国語学部他学科向け英語科目、他4学部向け英語科目)を担当することになり、それぞれの層における英語教育拡充を目的として、平成19年度から理事長特別研究費による「新英米学科による英語教育」プロジェクトを進めてきた。

本取組は、英米学科の長年の教育実践の伝統と、昨年来の英語教育拡充の試みの上に立って、英米学科専門英語教育の体系化・リソース化・可視化をいっそう明確にし、同時に、高い運用能力をもつ英米学科の学生を、学内英語教育の有力な推進者として位置づけ、ENGLISH SPACE(学内に設置予定の英語のみを使用する多目的英語学習スペース)や英語連続セミナーなど多様な学内英語空間での活動をリードする存在として育成することを目的とする。このことは、英米学科の学生にとっては英語使用機会の増大となり、かつ全学的な英語学習への機運を高め、学生の自律的学習支援ともなるものである。

本取組では、以下のような教育活動・研究活動を展開する。

(I) 英米学科専門英語教育の拡充—体系化・リソース化

- ・成長型データベースの構築による英語科目別段階別到達目標明確化・共通教材開発
- ・英米学科英語科目群と専門科目群の有機的構造構築

(II) 卒業論文作成のプロセス支援とプロダクト共有化・可視化

- ・卒業論文作成ハンドブックの全面的改訂
- ・中間発表会、英語での分野別卒論発表・討論会、学科卒論発表会

(III) 学内英語空間創設

・ENGLISH SPACE創設と活動(DVD鑑賞とディスカッション、英詩・英語絵本朗読会、読書会、海外研究者によるミニ講演会、多読用図書、海外協定校とのTV会議)---英語授業との連携

・プレイスメント・テスト/アチーブメント・テスト/学習支援としてのコンピュータによる英語コミュニケーション能力テスト

結果は不採択であったが(採択率15.7%)、質の高い大学教育等推進事業委員会からの審査結果には、本取り組みの「趣旨について評価できる」とあった。改善すべき点については、この取り組みによって身に付けられる力が社会のニーズや学生のニーズにあったものが明確にすること、評価のための具体的指標を設定すること、との指摘を得た。今後それらの点を考慮して、再度申請し、本学英語教育の一層の拡充を図りたい。

## 5. 英語科目担当教員の研修

英語教育共同研究室(E406)では、昨年度に引き続き、2008年度英語科目のシラバス・デ

ータベース化、教材リソース化を行った。また、来年度からの新体制づくりが進行するに伴い、新機軸である English for Interaction 用の洋書系テキストや副教材を整備した。

また、昨年度に引き続き、英語科目担当者の集い(全学英語教育)を 2009 年 1 月 28 日に開催した。専任 14 名(英文 6 名、英米 8 名)、非常勤講師 15 名、計 29 名が出席した。予め郵送しておいた新教育体制について、説明・質疑応答を行い、「英語 B」の評価について当面の方針を決定した。各教授者からの授業報告と活発な意見交換が続いた。最後に、英語空間創設の試みについて報告とさらなる積極的参加を依頼した。閉会後も、何人かの先生が、E406 で推奨テキストを実際に手にとって比較検討したり意見交換を続けた。

この英語科目担当者の集いにおいて、昨年同様「教授者コメント」原稿依頼を行い、欠席者にも集いの報告を送りその中で依頼した。

開始 2 年目にして、教材を借りていく、シラバスや教育内容データベースを見る、視聴覚教材を視聴するなど、少しずつ英語教育共同研究室の利用が増えてきた。一同に会しての研修は年に一度であっても、共同研究室があることで、各自が自由にリソースを活用し、研修を行えるようになってきていると言えよう。

## 6. 学内英語空間創設の試み…多様な英語学習支援

### 6.1 英語コミュニケーション能力テスト(CASEC キャセック)全学受験

導入検討制度を利用し始めてからの各月受験者数と全学平均点は以下の通りである。

	当月受験者数	累積受験者数	当月平均点[A] (1000 点)	[A]TOEIC 換算点 (990 点)	累積平均点[B] (1000 点)	[B]TOEIC 換算点 (990 点)
2008 年 7 月	454 人	454 人	<b>577.5</b>	568.9	<b>577.5</b>	568.9
2008 年 8 月	47 人	501 人	<b>602.9</b>	572.4	<b>579.9</b>	569.2
2008 年 9 月	15 人	516 人	<b>658.3</b>	641.7	<b>582.2</b>	571.3
2008 年 10 月	1151 人	1667 人	<b>549.8</b>	504.7	<b>559.8</b>	525.3
2008 年 11 月	70 人	1737 人	<b>628.9</b>	601.4	<b>562.6</b>	528.4
2008 年 12 月	16 人	1753 人	<b>616.9</b>	585.3	<b>563.1</b>	528.9
2009 年 1 月	177 人	1930 人	<b>645.4</b>	621.2	<b>570.6</b>	537.3

上述の通り、7 月と 10 月は全学受験の呼びかけをした月である。受験生は主に、一般が国語としての英語を履修している 1 年生と 2 年生である。2009 年 1 月は、開発協力校として CASEC テストとリーディングテストを実施する必要があり、英文学科と英米学科の 1 年生、2 年生に受験させた。英米 1 年生(昼・夜)は、1 月 20 日 English Phonetics の授業時間を利用しての全員受験、英米 2 年(昼・夜)と英文学科の学生は、1 月 21 日水曜午後に受験可能の学生のみ。

7 月から学内に CASEC 受験案内のポスターを掲示し、学務課カウンターにも受験案内

を置いた。しかし周知徹底は難しく、自主的に受験する学生は少ない。ただ、そのような学生は、総じて平均点が高く、今後この層を増やしていくことが本学英語力の引き上げにつながる。

## 6.2 英語連続セミナー

今年度後期に、一般教育科目「特別講義Ⅱ」として、「グローバルな視野とコミュニケーションのための英語連続セミナーⅡ」を開講した。詳しい報告は、別の機会に譲るが、昨年度に続く第2シリーズでは、一方で昨年好評であった学長による英国での体験談、武道を学ぶ留学生の話、日本英語教育の中枢を担う先生の話を用意し、他方、外資系銀行での勤務経験、生活習慣病予防、バードウォッチング、日本近代史、通訳案内業、南アフリカ NPO 活動、国際ジャーナリズムなど、一步専門に踏み込んだゲストの話も多く用意した。

受講生が120名を超えたのが影響したのか、今年度は質疑応答で進んで手を挙げる学生がやや少なかったが、英文エッセイは、毎回質の高いものが多く見られた。昨年同様、一週間以内に、ベストエッセイを Web で公開した。また英語の発話については毎週の質疑応答ではやや静かだったものの、最終回はディスカッションとし、2〜3人グループで自由に話し合ったあと(英語でも日本語でもよい)、各グループの代表に立って英語で発表させたところ、どのグループも次々と臆することなく最も印象に残っているレクチャーとその理由を述べていった。大学生にふさわしいレベルの口頭発表であった。

今年度受講生が、児童教育学科からの若干名の他は、外国語学部各学科と英文学科に集中し、それ以外の学部学科からの受講生がいなかったことは残念なことであった。次年度以降より全学的な参加が望まれる。

受講した学生からは、「英語の講義を聴く機会は初めてだったので不安だったが、興味深く聞くことができた」「少し分からない部分もあったが、だいたい理解できてうれしかった」という声が多数寄せられた。また、単位にならずとも来年度も聞きたいという学生もいて、このセミナーが本学英語空間の一つとして十分役割を果たしていると言えよう。

## 6.3 多言語競演レシテーション大会

今年度活動計画として、英語関連イベントの開催を挙げていたが、10月末〜11月上旬の「新・県大ファンファーレ」の中で、高等言語教育研究所主催のイベントとして「多言語競演レシテーション大会」として結実した。盛会となり、また出場者・聴衆としての参加者ともに有意義な会との意見が多く聞かれ、次年度以降も開催される見通しである。

英語関係では、英文学科と英米学科から各1組が出場した。英米学科に関しては、それに先立ち、学科ミニレシテーション大会が開かれ3年生が競い合い、その選考結果により本選出場者を決定した。来年度以降も継続されれば、学科として組織的に、3年次でのレシテーション大会出場に向けて1年次から段階的にレシテーション訓練をさせたり、また



学科ミニレシテーション大会を参観することで、目標を持たせることも可能となる。

#### 6.4 「日米学生テレビ会議」

英語連続セミナーに名古屋アメリカンセンター館長や在名古屋米国領事館首席領事を招いたことが契機となり、今年度も「日米学生テレビ会議」(2008年11月20日)に本学学生が参加した。英米学科3年戸谷鉦一君が名古屋からの代表質問者となり、堂々と英語で内容的に高度な質問をした。その様子は同日、朝日新聞などで写真入りで報道された。

#### 6.5 「英語をすらすら読もう」英語多読のすすめ

英語学習に **graded readers** (段階的に特定語彙数で書かれた読本)を使った多読が効果的であることは既に広く認められている。単に理解可能なインプットを増やすためだけでなく、学習者がレベルに応じたテキストを読むことで未知の単語に対しても辞書を引かなくても推論が働くようになる、さまざまなコンテキストで単語に出合うことで多義語の習得が自然に進む、一冊の本を読み切ることで達成感が得られさらに学習意欲が湧くなど、多くの利点が挙げられている。**Penguin** や **Oxford University Press** から6-7レベルで、様々なジャンルに渡って、学習者の興味を引きそうなカラー表紙の多読用図書がライブラリーとして出版されている。

昨年度から準備を進めてきたが、学内に常設スペースを作ることは不可能で、それ以外の開催方法を模索してきた。学術情報センターの多大なご協力を得て(利用規程を改正して頂いた)、図書館のグループ学習室を利用しての試験的開催にこぎつけた。

用意したのは **Penguin Readers 1** セット(レベル0からレベル6まで約200冊)---独自のラベルを付した、個人用記録ファイル---2種類の記録用紙、名前用シール、難易度別貸し出し簿、利用者名簿である。

案内は学内にポスター掲示、チラシ配布、図書館ホームページお知らせによって行った。

開催日と利用状況は以下の通りである。

2009年1月19日(月)	11:45~13:15	<b>6名</b>
	16:15~17:45	<b>2名</b>
1月23日(金)	11:45~13:15	<b>6名</b>
	16:15~17:45	<b>7名</b>
1月26日(月)	11:45~13:15	<b>3名</b>
	16:15~17:45	<b>6名</b>
1月30日(金)	11:45~13:15	<b>6名</b>
	16:15~17:45	<b>6名</b>
2月13日(金)	11:45~13:15	<b>4名</b>
	16:15~17:45	<b>15名</b>
3月18日(水)	11:45~13:15	
	16:15~17:45	

利用者はまだごく少数とはいえ、中にはすでに 150 ページ以上を読んだ学生もいる。また、希望者の声により、CD 付きの graded readers、CD ウォークマンとヘッドホン各 5 台を今年度予算で購入した。新学期からの定期的な開催(曜日を決めて週 1 回)を計画しているところである。

## 英語の本をすらすら読もう!!

*Let's Read English Books  
without Tears or Dictionaries*

レベル別多読用図書を使って、英語の本を一冊読み終える充実感を味わいませんか。例えばレベル 2 は英語を 600 語知っていれば読める本です。小説だけでなく、映画スターの伝記などさまざまなジャンルの本があります。個人用の読書記録ファイルも用意しました。どなたでも自由にどうぞ。

**場所: 図書館 2 階 グループ研究室 A**

**日時:**

1月19日(月)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

1月23日(金)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

1月26日(月)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

1月30日(金)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

**追加開室!!**

2月13日(金)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

3月18日(水)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

問い合わせ先: 英米学科 宮浦 国江  
(kmiyaura@for.aichi-pu.ac.jp)

### 7. 今後の課題

今年度の活動から、課題として次の点が上げられる。

- ・ 広報の充実 CASEC は 2009 年 7 月まで本学学生であれば、「使い放題」という恵ま

れた条件にあるが、まだ全学生への周知は不十分のままである。また、多読のすすめにしても知れば利用を希望する学生は潜在的に多くいると思われるが、学内ポスターは効果が限定的である。個々の学生に直接届く手段がほしい。

・CASEC 継続利用の確保のための学内理解 現在は導入検討制度利用中のため、84 万円で使い放題であるが、現在のところ、2009 年 7 月以降の手当ができていない。2010 年 4 月のプレイスメント・テスト用は学務課から予算要求予定であるが、最低でも 2 学年分で 710 人×2=1420 回分、約 269 万円必要である。全学英語教育として理想的には、

1 年生 4 月プレイスメント・テスト

1 年生 7 月前期アチーブメント・テスト

1 年生 2 月後期アチーブメント・テスト=2 年次 4 月プレイスメント・テスト

2 年生 7 月前期アチーブメント・テスト

2 年生 2 月後期アチーブメント・テスト

と 5 回、3550 回分、約 600 万円が望ましい。CASEC はテスト水準にブレがないよう設計されているため、客観的な学習成果/教育効果の測定尺度として、継続的に利用するほど、その効果は大きくなる。経常的予算措置を確保したい。

・英語教育担当教員の研修支援、情報共有、役割分担 これまで 2 年間で、多少なりとも「本学英語教育」として語ることができるような状況ができてきたといえよう。時代のニーズ、学生のニーズに対応すべく、今後一層「個の努力」から「共同体としての努力」の方向を押し進め、本学英語教育拡充を図っていきたい。

・新英米学科専門科目としての英語教育 本年度、最重要課題として全学英語教育に力を注いできたが、新英米学科の英語教育も新たな科目、学科定員の大幅増加に伴う問題がある。英米学科の学生が、全学的英語学習活動の推進者の役割を健全に果たしてこそ、本学の英語教育の向上が図られるであろう。その点からも、英米学科学生向け英語教育の到達目標明確化、教授法・教材研究にも今後一層努力していく必要がある。

・学生のニーズ調査、学内からの意見聴取 本年度行う予定であったが、余裕がなく実施できなかった。今後、FD 委員会実施の学生による授業アンケートの他にも、独自に英語教育に特化した学生のニーズ調査、他学部、他学科教員からの意見聴取により本学にふさわしい英語教育のあり方を探っていきたい。

## 本学英語教育一体系化・リソース化・可視化の試み

外国語学部英米学科  
宮浦 国江  
kmiyaura@for.aichi-pu.ac.jp

### 1. 背景・経緯

- 1.1 平成19年度 理事長特別研究費  
「新英米学科による英語教育一体系化・リソース化・可視化の試み」
- 1.2 平成20年度 理事長特別研究費  
高等言語教育研究所英語部門の活動として  
「英語空間創設プログラム」

### 2. 活動内容

- 2.1 英語科目(英米学科専門英語科目・全学英語科目)の体系化・リソース化
- 2.2 全学英語教育拡充に向けて一可視化の試み
- 2.3 平成21年度新体制に向けて
  - 2.3.1 全学英語科目実施体制づくり
  - 2.3.2 CASEC(コンピュータによる英語コミュニケーション能力テスト)
- 2.4 英語科目担当教員の集いと情報・問題意識の共有化
- 2.5 大学英語教育関連学会・他大学からの示唆

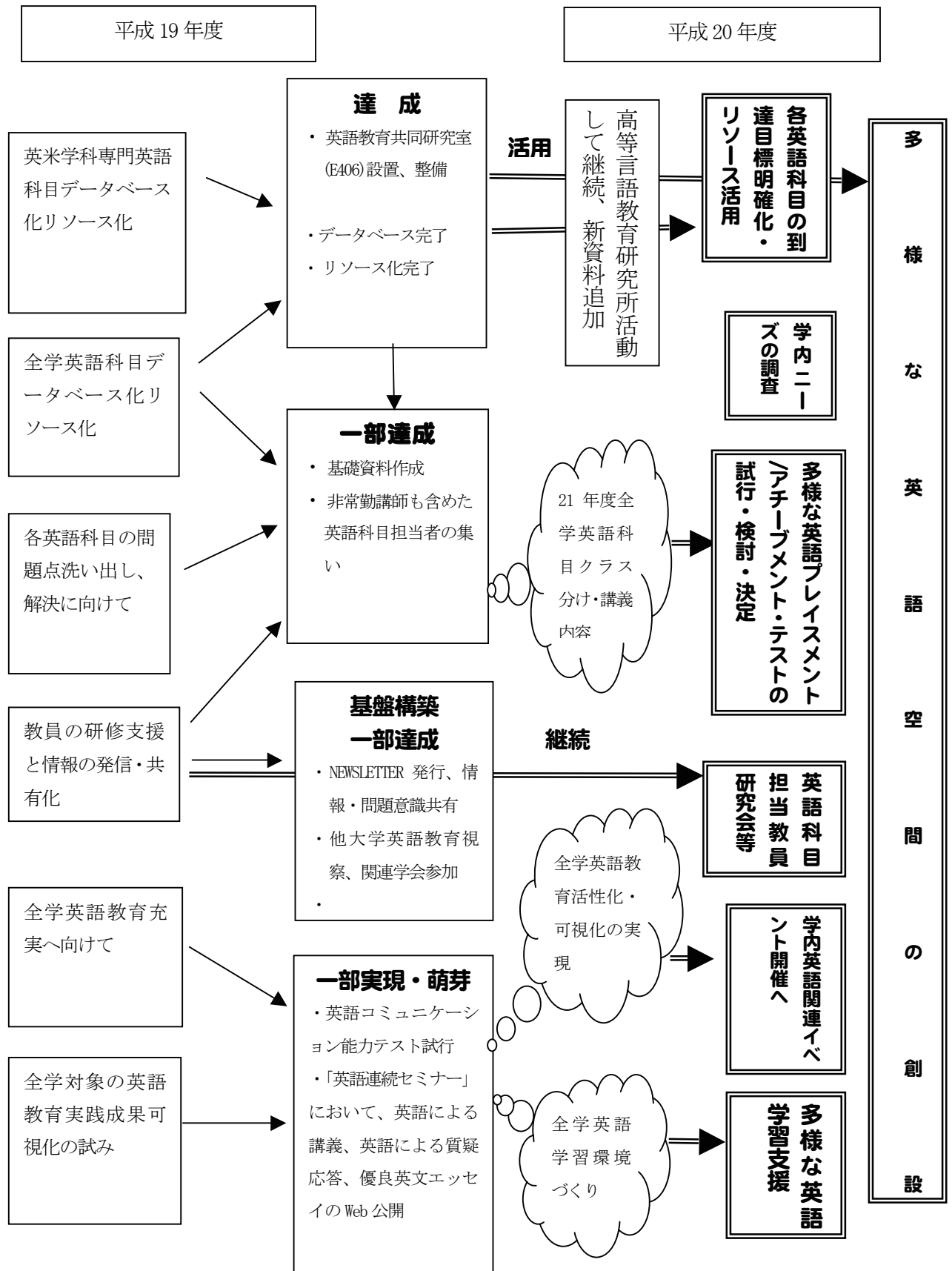
### 3. 今後の課題

---

#### 1. 背景・経緯

- 1.1 「新英米学科による英語教育一体系化・リソース化・可視化の試み」
  - ・平成21年度 英米学科・英文学科の合併  
三層の英語教育に責任、それぞれに課題あり
    - 英米学科専門英語科目
    - 外国語学部他学科向け英語科目
    - 他学部向け英語科目
  - ・中期目標・中期計画に「全学英語教育の充実」

# 本取組概念図



## 1.2 「英語空間創設プログラム」

- ・「新英米学科」と「国際関係学科」
- ・高等言語教育研究所設立 英語部門として
- ・教育 GP 申請「探求力・発信力を英語卒論に結実させる教育」

## 2. 活動内容

### 2.1 英語科目(英米学科専門英語科目・全学英语科目)の体系化・リソース化

- ・E406 英語教育共同研究室
- ・「英米学科専門英語科目」「全学英语科目」
- ・「シラバス・データベース」2003 年度分から 2008 年度分まで
- ・使用テキスト・教材の現物保管 → 教材の再活用、精選
- ・「授業内容・データベース」  
教授者コメント「典型的な授業進行(90 分の時間配分)」「教育効果/学生の反応」「改善点」  
→ 実質的 FD 活動、授業改善、  
到達目標設定、共通シラバス、カリキュラム見直し

### 2.2 全学英语教育拡充に向けて---可視化の試み

- ・特別講義「グローバルな視野とコミュニケーションのための英語連続セミナー」  
英文エッセイ Web 公開
- ・アメリカ大使館主催「国際教育週間日米学生テレビ会議」(2007.11.16)
- ・学生自主企画研究
- ・多言語競演レシテーション大会(2008.11.2 開催)

### 2.3 平成 21 年度新体制に向けて

#### 2.3.1 全学英语科目実施体制づくり

- ・①外国語学部 200 人 6 クラス  
(1 年生は月曜 1 限と木曜 2 限、2 年生は月曜 2 限と木曜 1 限)
- ・②他 4 学部 370 人 11 クラス(金曜)、3 学部 280 人 8 クラス(火曜)  
(1 年生は火曜 2 限と金曜 1 限、2 年生は火曜 1 限と金曜 2 限)
- ・35 人クラス
- ・習熟度、関心に応じて
- ・English for Interaction と English for Academic Studies

#### 2.3.2 CASEC(コンピュータによる英語コミュニケーション能力テスト)

- ・平成 21 年度からクラス分けのためのプレイスメント・テスト必要
- ・各種プレイスメント・テスト比較

	試験 時間 (分)	形 式	内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	採 点 期 間 (日)	結 果 表 示	受 験 料 (TOEFL 以外は円)	
								個 人	団 体
TOEIC	120	P M	リスニング リーディング	年 8 回	77	30	10 -990	5565	@5565 入 50 万 年 10 万

TOEIC-IP	120			随時	団体	7		4040	@2990 入 50 万 年 10 万
TOEFL	210	P	リスニング リーディング ライティング 文法	地域 別	10	28	310- 677	\$130	
TOEFL-CBT	210- 240	C		随時	4	12 - 35	0 - 300	\$130	
英検	80 -165	P	語彙・熟語・文法力 読解力 作文力 聴解力	年 3 回	300	21	5 級 - 1 級	1400 - 7500	
GTEC	80	C	リスニング リーディング ライティング スピーキング	随時	69	10	0 - 1000	12600	9450
CASEC	40 -60	C	語彙 イディオム リスニング ディクテーション	随時	自宅 大学	即時	0 - 1000	3500	@1890 - @3200

・ CASEC 試用結果 (H19 年度研究費から 35 万円(120 回分))

		平均点 /1,000 点
2008 年 1 月	英米学科 1 年昼全員 45 人	682
2008 年 1 月	英米学科 1 年夜全員 28 人	656
2008 年 2 月	全学有志 35 名	646
2008 年 4 月	英米学科 1 年昼全員 44 人	645
2008 年 4 月	英米学科 1 年夜全員 32 人	613
2008 年 5 月	英語科目担当者 50 人の内、約 25 人受験	

参考データ

CASEC (2001 年 1 月 1 日-2007 年 2 月 28 日 累計受験者数:402,595 人のデータ)  
(累計受験者数は 2008 年 2 月末で 511,228 人)

	Sec. 1	Sec. 2	Sec. 3	Sec. 4	Tatal
平均	110.4	108.1	120.8	99.5	438.8
企業	142.3	136.4	145.1	122.5	546.4
大学	120.9	117.0	122.3	108.4	468.7
中高	68.6	71.6	98.7	67.6	306.6

- ・ 2008 年 7 月から 2009 年 7 月まで一年間全学「使い放題」可能 (導入検討制度を利用、20 年度研究費から 84 万円)
- ・ 2008 年 7 月一般教育英語科目 1 年、2 年生向け全クラス  
教員を通じて「お知らせ、CASEC 紹介、受験要領」を配布、  
7 月中の全員受験を依頼
- ・ 全学的には、学内ポスター、学務課カウンターにポスターと「お知らせ、CASEC 紹介、受験要領」
- ・ 夏休みに中に現状把握・分析



学科学年別受験者数

		昼間主コース					夜間主コース				
		1年	2年	3年	4年	計	1年	2年	3年	4年	計
文学部	国文	38	5	0	0	43	12	3	0	0	15
	英文	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3
	日文	32	6	0	0	38	3	5	0	0	8
	児教	27	15	0	0	42	0	2	0	0	2
	社福	36	8	0	1	45	0	7	0	0	7
外国語学部	英米	26	3	1	0	30	17	4	1	0	22
	フランス	24	20	0	2	46	0	3	0	0	3
	スペイン	34	13	1	0	48	0	0	0	0	0
	ドイツ	31	1	0	0	32	0	3	0	0	3
	中国	7	19	0	1	27	1	3	0	0	4
情報	システム	30	1	0	1	31					
	地域情報	14	6	0	3	23					
大学院		2	0	0	0	2					
		301	97	2	7	407	34	31	2	0	67

学科学年別平均点

		昼間主コース					夜間主コース				
		1年	2年	3年	4年	計	1年	2年	3年	4年	計
文学部	国文	539.3	451.6				525	453.7			
	英文						629	690	678		
	日文	551.6	579.7				575.7	525.4			
	児教	542.5	583.6					546			
	社福	553.6	534.8		469			492.1			
外国語学部	英米	666.6	725.7	763			640.6	741.8	797		
	フランス	595.5	622.8		653.5			585.7			
	スペイン	608.7	620.8	625							
	ドイツ	617.4	521					614.3			
	中国	633.9	635.2		447		805	620.7			
情報	システム	513.1	500		744						
	地域情報	503.2	502.8		443.3						
大学院		501									

## 2.4 英語科目担当教員の集いと情報・問題意識の共有化

- ・英文学科・英米学科教員
- ・専任・非常勤講師による英語科目担当者の集い  
英米学科専門英語科目(2008.2.18)(英文3、英米6、非常勤10、計19人)  
全学英语科目(2008,2,19)(英文2、英米7、非常勤11、計20人)  
両日とも10時30分から14時30分まで、ランチも懇談会を兼ねて。
- ・ **NEWSLETTER**
- ・ 2学科合同会議
- ・ E406 英語教育共同研究室で定期的会合

## 2.5 大学英語教育関連学会・他大学からの示唆

- ・「多言語教育」(京都外国語大学「ティームティーチングによる二言語同時学習」)
- ・「ポートフォリオ」学生の英語学習の記録
- ・「学習支援」 e-Learning の是非
- ・「CAN DO リスト」科目別、学年別到達目標の明確化
- ・「英語で行う授業」専門科目・全学科目(大阪女学院大学、創価大学等)
- ・「英語空間」英語のみ使用の空間、多読用教材、DVD など(南山大学 WORLD PLAZA)
- ・「国際交流」協定校との交換留学

## 3. 課題!

### 3.1 来年度からの全学英语教育

- ・共通テキスト  
英語による英語教育  
到達目標の設定、  
学内ニーズ調査

### 3.2 英米学科専門英語教育

- ・到達目標設定
- ・新科目の内容

### 3.2 英語空間の創設

- ・多読用図書の貸し出し
- ・図書館との連携

### 3.3 CASEC の活用

- ・学内での定期的一斉受験
- ・授業との連関

### 3.4 問題意識と情報の共有化

*For a Better English Education at APU*

## 平成 21 年度からの新県立大学全学英语教育

### I. 全学英语科目について

#### 1.1 完成時 時間割とクラス数

	月	火	水	木	金
1	①「英語 I」 English for Academic Studies (外語) (200 人 6 クラス)	②「英語 II」 English for Interaction (日文・教福・情報) (280 人 9 クラス)	後期「英語 I」 (看護)45 人	①「英語 II」 English for Academic Studies (外語) (200 人 6 クラス)	②「英語 I」 English for Interaction (日文・教福・看護・情報) (370 人 11 クラス)
2	①「英語 II」 English for Interaction (外語) (200 人 6 クラス)	②「英語 I」 English for Academic Studies (日文・教福・情報) (280 人 9 クラス)	後期「英語 I」 (看護)45 人	①「英語 I」 English for Interaction (外語) (200 人 6 クラス)	②「英語 II」 English for Academic Studies (日文・教福・情報) (280 人 8 クラス)
3		「英語 III」 (全学部) 3 クラス		後期「英語 I」 (看護)45 人 英語 III」 (全学部) 3 クラス	
4				後期「英語 I」 (看護)45 人	

- ・ 1 クラス平均 35 人、
- ・ CASEC によるクラス分け

#### 1.2 「英語 I」「英語 II」「英語 III」の科目の概要

(設置認可申請書から)

##### 英語 I

「英語 I は、高校英語を基礎として、日常的话题を中心とした多様な題材について、必要な情報を聞き取ったり読み取ったりする英語能力を総合的に獲得させ、さらに、得た情報・語彙・表現を用いて、自分の意思が正しく相手に伝わるように発信する技能を習得させることを目指す。必要に応じて英語音声や英文法の基礎知識の確認も行う。リスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの 4 技能を関連づけながら向上させ、総合的コミュニケーション能力の基盤を養う」

##### 英語 II

「英語 II は、英語 I を土台に、リスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの 4 技能の更なる向上を目指す。日常生活や社会・文化についての様々な題材を取り

上げ、必要な情報の聞き取りや読解に加えて、英語による意見の発表や質疑応答などの作業を行うことによって総合的に英語能力を発展させる。必要に応じて、適切な読みのストラテジーを用いて必要な情報を読み取る技能や、獲得した情報。語彙・表現を目的に応じてコミュニケーションに生かす技能を習得させることを目指す。このような授業を通して、様々な場面で臆せず英語でコミュニケーションを行う英語力の育成を図る。」

### 英語 III

「英語 III は、英語 II を土台に、取り扱う題材の領域を広げレベルを上げながら、総合的英語コミュニケーション能力の育成を目標とする。リスニング、リーディングではニュースや英語、雑誌記事などに用いられる自然な英語の聴解力、読解力を高めることを目標とする。一方、スピーキングやライティングでは、より複雑な知的テーマについて、説明、質疑応答、討論を行う力や、説明文、エッセイ、手紙、論文など多様なタイプのライティングスタイルを身につけることによって、発信型技能の向上を図る。」

#### 1.3 週2回の特徴づけ

English for Academic Studies 時間割上は「英語 IA」「英語 IIA」	English for Interaction 時間割上は「英語 IB」「英語 IIB」
1年 ①月、②火 2年 ①木、②金	1年 ①木、②金 2年 ①月、②火
大学での勉学のための英語力養成 リーディングによる内容把握を中心に 一般教養的トピック→専門的すぎない (文化・言語・時事・科学・社会問題等)	コミュニケーション能力養成 英語でのコミュニケーション活動を通じて、 リスニング、スピーキングの力を高める
テキスト 担当者の選択、独創性による 学部特性を配慮することも可	テキスト※ 洋書系テキストなど、コミュニケーション 場面を想定したもの

※ 参考 平成21年度用シラバスでは、「英語 IA」「英語 IB」の授業目的、講義概要を、次のように原則的に統一して記載することとした。

「授業目的」（「英語 IA」「英語 IB」とも）

「英語 I では、高校英語を基礎として、日常的な話題を中心とした多様な題材について、必要な情報を聞き取ったり読み取ったりする英語能力を総合的に獲得させ、さらに、得た情報・語彙・表現を用いて、自分の意思が正しく相手に伝わるように発信する技能を習得させることを目指す。」

「講義概要」

「英語 IA」の場合

「英語 IA は、English for Academic Studies として、大学初年次の知的関心に応じた多様な題材から、必要な情報を正しく読み取ったり聞き取ったりする英語能力を涵養し、さらに、得た情報・語彙・表現を発信に使える技能を習得させる。」

「英語 IB」の場合

「英語 IB は、English for Interaction として、多様なコミュニケーション場面で

必要なスキルを習得させる。4技能を関連づけながら向上させることを目指すが、特にリスニング、スピーキング能力の涵養に重点を置き、音声英語によるコミュニケーション能力の基盤を養う。」

#### 1.4 1年生用クラス分け

- ①外語 月1、木2、 [6] 上級2、標準4  
 ②日文・教福・看護・情報 金1、 [11] 上級1、標準8、基礎2  
 日文・教福・情報 火2、 [9] 学部ごとに上級1、標準2

※ 標準クラスについては、成績順による輪切りではなく、該当者グループ内で均等になるようなクラス編成。

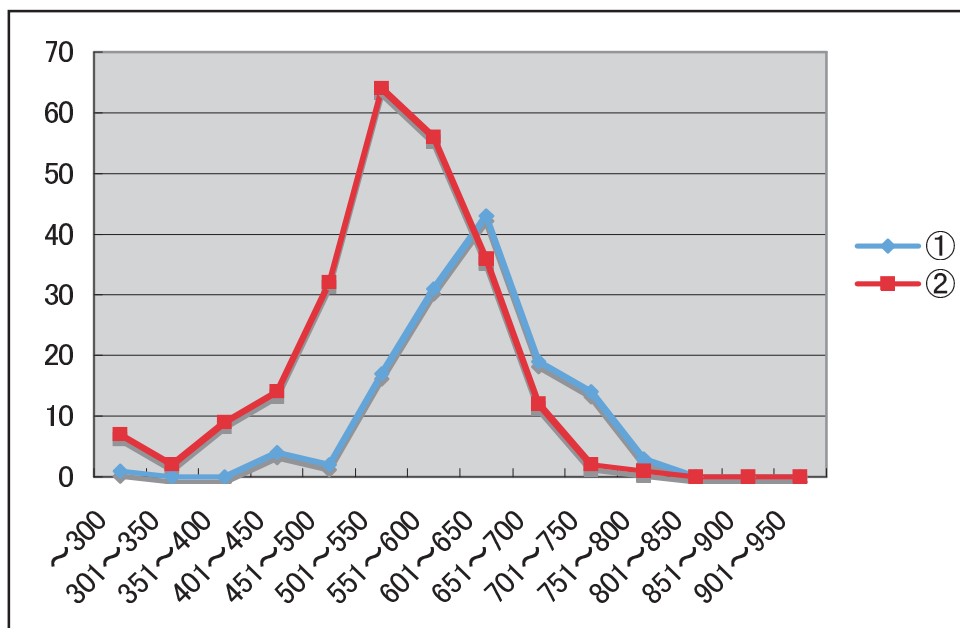
#### English for Interaction

上級 650点以上 (TOEIC 625点相当)、 英語使用率 75%～100%  
 標準 451点から650点 英語使用率 50%～80%  
 基礎 450点未満 (TOEIC 375点相当) 英語使用率 約 50%

#### 参考資料 CASEC10月全学一斉受験1年生昼

	～ 300	301 ～ 350	351 ～ 400	401 ～ 450	451 ～ 500	501 ～ 550	551 ～ 600	601 ～ 650	651 ～ 700	701 ～ 750	751 ～ 800	801 ～ 850	851 ～ 900	901 ～ 950	計
①	1	0	0	4	2	17	31	43	19	14	3	0	0	0	134 人
②	7	2	9	14	32	64	56	36	12	2	1	0	0	0	235 人

- ① 外国語学部(英米を除く)  
 ② 文学部(英文を除く)・情報科学部



1.5 English for Interaction のテキストについて

- ・洋書系テキスト等の使用について

1年	<p>Pre-Intermediate レベル(TOEIC 380)、 Lower Intermediate レベル(380-450)</p> <p>&lt;Pearson Longman&gt; <i>Top Notch 2, Side by Side 2 or 3, New Cutting Edge Pre-Intermediate,</i>          &lt;Oxford&gt; <i>American Headway Level 2, New Headway Pre-Intermediate,</i>          &lt;Cambridge&gt; <i>face2face Pre-Intermediate, Interchange Level 2, Touchstone Level 2</i>          &lt;Cengage Learning&gt; World Link 1          &lt;金星堂/Cambridge&gt; <i>Activate Your English Pre-intermediate</i>          &lt;成美堂&gt; <i>World Interviews</i></p>
2年	<p>Intermediate レベル (450-650)</p> <p>&lt;Pearson Longman&gt; <i>Top Notch 3, Summit 1, Side by Side 4, New Cutting Edge Intermediate,</i>          &lt;Oxford&gt; <i>American Headway Level 3, New Headway Intermediate,</i>          &lt;Cambridge&gt; <i>face2face Intermediate, Interchange Level 3, Touchstone Level 3</i>          &lt;Cengage Learning&gt; World Link 2 or 3</p>

- ・ クラス分けの基準から見ると多少低めの設定。しかし洋書系テキストに慣れていないことを考えると、当面この程度のレベルを「標準」用に設定して良いように思われる。(金星堂/Cambridge の *Activate Your English* は、Pre-Intermediate Coursebook を1年次用として2009年度より出版。オリジナル+日本で使いやすいように追加練習問題)
- ・ 出版社・コースブックにより同じレベル設定でも、難易度に差がある。上のレベルに準じて、担当者が選択する。

- ・ 基本的に洋書系テキストは、多くの内容が盛り込まれている。

**上級クラス**は、テキストをほぼ全体カバーし、かつ、余裕がある場合は、ビデオ教材や英字新聞からの記事など適宜教材を追加する。

**標準クラス**は、テキストの内容や練習問題のうち、主要なものをカバーする。

**基礎クラス**は、Elementary レベル(または Beginner レベル、Upper Beginner レベル)のものを選び、必要に応じて日本語を補いながら、文法基礎事項や基本語彙を習得させる。

- ・ 上記テキストは通年用であるため、前後期で担当者が替わる場合には、前半・後半でユニット数を分ける。仮に前期終了を待たずに前半のレッスン・ユニットがすべて終了していても、後期部分には入らずに、追加教材(ビデオ・英字新聞記事・ベストセラー一節等)を用いる。

・洋書系テキストを使用する場合は、高等言語教育研究所・英語部門の予算から、Teacher's Manual, DVD 教材、Workbook 等必要なものは購入し、共有して使用する。英語教育共同研究室(E406)に保管する。

- ・ 上の表にもあるように、近年は日本の出版社からも英語コミュニケーション能力養成のためのテキストが出版されているので、参考にされたい。

#### 1.4 プレイスメント・テストと評価

- 21年度から、習熟度に応じたクラス編成をすることになり、プレイスメント・テストを実施することになった。当然評価にも習熟度は反映されるが、単に、プレイスメントテストの成績のみで、最終成績が決まるわけではない。
- 基本的な考え方として、「プレイスメントテスト」は、学習者の習熟度に応じた、より効果的な学習環境を提供するために行うものである。
- 教授者が、授業を通じて学生の英語力の養成を図り、平常点・課題・定期テスト等に基づいて行う評価は、その授業を通じての学生の英語力の伸長を測るものであり、重要な意味を持つ。
- 「英語A」については、従来通り、教授者による評価のみで行う。
- 一方、英語コミュニケーション能力の養成を重点とする「英語B」においては、プレイスメント・テストだけでなく、学期末に何らかの統一のアチーブメント・テスト(21年7月はCASEC利用)を実施し、その成績を評価に組み入れることにする。慎重に議論した結果、当面、統一テストによる成績を50%、教授者が付ける成績を50%として学期の最終評価とする。ただし、今後も検証と議論を続ける。

※ 参考 平成21年度用シラバスでは、「英語IB」の「評価」を、次のように原則的に統一して記載することとした。

「統一テストによる評価 50%、教授者による評価 50%」—この後に、各教授者が自身の評価の内容(例えば、出席、授業参加度、課題、定期テストなど)を記載する。



## 2. 平成 21 年度の全学英語科目

### 2.1 平成 21 年度 時間割とクラス数

	月	火	水	木	金
1	①「英語 I」 English for Academic Studies (外語) (200 人 6 クラス)	「英語インター ミディエイト II」 (文・情) 6 クラ ス	後期「英語 I」 (看護)45 人	「英語インター ミディエイト II」(外語) 4 ク ラス	②「英語 I」 (日文・教福・看 護・情報) (370 人 11 クラス) English for Interaction
2	「英語インター ミディエイト II」(外語) 4 ク ラス	②「英語 I」 English for Academic Studies(日文・教 福・情報) (280 人 9 クラス)	後期「英語 I」 (看護)45 人	①「英語 I」 English for Interaction (外語) (200 人 6 クラス)	「英語インター ミディエイト II」(文・情) 6 クラス
3		「英語アドヴァ ンスト」(全学部) 3 クラス		前期「英語 I」 (看護)45 人 --- 「英語アドヴァ ンスト」(全学部) 3 クラス	
4				前期「英語 I」 (看護)45 人	
5					
6		「英語インター ミディエイト I」 <b>再履</b> (文) 1 クラス	「英語インター ミディエイト II」(外語) 2 クラス 「英語アドヴァ ンスト」(全学部) 1 クラス		「英語インター ミディエイト I」 <b>再履</b> 1 クラス
7		「英語インター ミディエイト II」(文) 2 クラス	「英語インター ミディエイト I」 <b>再履</b> 1 クラス		「英語インター ミディエイト II」(文) 2 クラ ス (外) 2 クラス 「英語アドヴァ ンスト」(全学部) 1 クラス

2008 年 12 月  
外国語科目作業部会長  
宮浦 国江

専門分野スペイン語教育における教授者の役割  
—愛知県立大学「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」の経験から—

外国語学部スペイン学科 糸魚川美樹

# 専門分野スペイン語教育における教授者の役割 —愛知県立大学「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」の経験から—<sup>1</sup>

外国語学部スペイン学科 糸魚川美樹

## 1. はじめに

法務省入国管理局の統計によれば、2007年末愛知県の外国人登録者数は約22万人(外国人登録者数全体の約10パーセント)で、東京都について第2位となった(<http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html>)。愛知県の外国人登録者数のうち、ブラジル出身者がもっとも多い(2008年末、約7万8千人)ことはよく知られている<sup>2</sup>。スペイン語圏出身者はペルー出身者がもっとも多く、2008年末約8500人で、スペイン語圏全体では1万人をこえる(<http://www.pref.aichi.jp/0000022230.html>)。外国籍住民のなかには、日本語の運用能力が不十分で、医療や災害などの場面で、「コミュニケーション支援」を必要としている人たちも多く、また対応する医療従事者側でも、業務を円滑に遂行するためには、同様の「支援」を必要としていると考えられる。

このような状況のなかで、愛知県立大学では、「平成19年度社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託業務」として「ポルトガル語スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成講座」(以下では、通称「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」を使用)を2007年から3年間実施することになった。本事業学外評価委員であり、医療通訳研究会代表村松紀子氏が本事業について述べているように、「大学における医療現場でのコミュニケーション支援者の育成は、たぶん日本でははじめての試み」(愛知県立大学 2008a, 215)であり、また日本のスペイン語教育においても新しい試みである。このことから、実行委員として関わっている執筆者が、講座の報告を兼ねた形でその詳細を記述し、講座での経験をふまえ、専門分野スペイン語教育のあり方や教授者が果たす役割を考察することは、今後のスペイン語教育にとって有意義であると考えられる。

## 2. 愛知県立大学「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」

スペイン語講座についての考察に入るまえに、「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」の概要と目的を確認する。

---

<sup>1</sup> 本稿は、2008年10月25日関西スペイン語学研究会315回例会における「愛知県立大学『医療分野ポルトガル語・スペイン語講座』—専門分野スペイン語教育における教授者の役割」という題目での研究発表、および、同年10月28日愛知県立大学第2回言語教育研究会において「愛知県立大学「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」からみた専門分野スペイン語教育」という題目での研究発表に、加筆・修正したものである。本稿は、2007年度講座が考察の対象になっているが、執筆時点では2008年度講座がほぼ終了している。本稿で参考にしたweb上の資料は、2009年2月10日確認している。なお、本研究は、独立行政法人日本学術振興会平成20年度研究費補助金(基盤研究C)交付対象研究「スペイン語話者への情報提供からみた多言語情報サービスの現状と課題」(課題番号20520508)の成果の一部である。

<sup>2</sup> 2008年末現在、愛知県に登録しているブラジル出身者の対前年増減率は、マイナス1.6%となっている。

## 2.1 事業の概要

本事業の「概要」の一部を引用する(( )は引用者による)。

本学(愛知県立大学)スペイン学科卒業生および愛知県立看護大学または看護専門学校卒業生のように、これらの分野のいずれかの知識を有している医療関係現職の社会人および育児等による離職者を対象に、学生時代に学んだ分野を学び直し、必要な他の分野を学んでもらうことによって、コミュニケーション支援能力を身につけ、東海地域のニーズに対応できる人材を養成する。スペイン学科卒業生や看護師や保健師の有資格者のように必要な分野の異なった部分を既に習得している受講者が一つクラスで学ぶことを活かし、教授者から一方的な講義のみでなく、グループ学習やロールプレイングを取り入れた能動的な学習ができる教育プログラムとする(愛知県立大学 2008a, 1)

本講座は、大学時代にポルトガル語やスペイン語を専攻した者、看護を専門に学んだ者、医療関係従事者または離職者を対象としており、その目的は、受講者が学習したことのある分野を別の形で「学び直し」すことを通して東海地域のニーズに対応できる「コミュニケーション支援能力」を身につけてもらうことである。すなわち、医療関係者に対象を限ったポルトガル語・スペイン語講座というわけではない。また、各言語を入門レベルから始めることもあり、医療通訳者を養成する講座までには至っていない。日本には医療通訳の認定制度はなく、ボランティアに頼っているのが現状である<sup>3</sup>。換言すれば、本講座を受講しても、新しい職に就ける可能性が大きくなるとはいえず、また医療関係者であっても、ポルトガル語またはスペイン語を習得したからといって、昇給や昇進が約束されることは考えにくい<sup>4</sup>。「必要な分野の異なった部分を既に習得している受講者が一つクラスで学ぶことを活かし」、本講座を通して、新しいネットワークや、支援活動のあり方に結びつくよう、愛知県立大学スペイン学科教育研究の経験をいかした講座が企画されている。

この点について、先に引用した村松氏による意見書のなかで、「どのニーズに絞ってカリキュラムを提供するのかを、明確しなければ、参加者の期待を裏切ることになる」、また、「最終的に県立大で認定するのは、どの分野のどのような資質をもった支援者であるかを明示することで、終了後の人材活用にも繋がると」という指摘がされている(愛知県立大学 2008a, 215)。

## 2.2 教育プログラム

次に、本事業の大部分を占める教育プログラムの内容と構成について確認したい。本講座は社会人を対象とし、2007年度については、「1日3授業時間を1週に1日、12週間で12日の講義プラス1日の公開講演会出席」(愛知県立大学 2008a, 2)というプログラムが設定されている。「3授業時間」は、2授業時間を語学に、1授業時間を「基礎知識を学ぶ」にわかれている。語学は、ポルトガル語かスペイン語を受講者が選択する。

<sup>3</sup> 日本における医療通訳の現状については、水野(2008)、灘光(2008)を参照。

<sup>4</sup> 本事業の一環として「外国人医療コミュニケーション支援能力養成に関する視察」が計画されており、執筆者は、スペイン国立ジャウマー世大学の「医療分野における異文化ソーシャルワーカー養成講座」Universitat Jaume I :Curso de Mediación Intercultural e Interpretación en el Àmbito Médico を視察した。ジャウマー世大学もスペインの大学としては初めて、医療分野の支援者を養成する講座を開講したが、スペインにおいても医療通訳制度は整っておらず、日本と同様の問題を抱えている(糸魚川 2008, 186-190)。スペインにおけるコミュニケーション支援については、Bermúdez y otros (2005)、Sales Salvador (2006)などを参照。

通常講座[「語学講座(ポルトガル語またはスペイン語を選択)」180分  
+「基礎知識を学ぶ」90分]×12回 + 公開講演会

1年目は各言語「入門」、2年目は各言語「入門」「中級(1)」、3年目は「入門」「中級(1)」「中級(2)」というように、レベル別にクラスを増やしていく予定である。語学講座は、「医療分野コミュニケーションを目指す内容とし、基礎的な通訳技術実践と基礎的医療通訳実践の時間、グループ学習やロールプレイングの時間も含」(同上)んでいる。

「基礎知識を学ぶ」では、医療現場において、南米出身者へのコミュニケーション支援に必要な知識が身につけられるよう、毎回異なったテーマについて専門家を招き講義を受ける。2007年度で扱った分野は、「多文化共生」「在住外国人の現状」「中南米文化」「医療制度」「医療通訳」に大別できる。このように本講座は、医療分野ポルトガル語・スペイン語という語学講座だけでなく、それを地域でいかすことができるよう、さまざまな知識を身につけるプログラムとしての工夫がされている。

### 3. 医療分野スペイン語教育

以下では、「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」の2007年度「スペイン語入門」を振り返りながら、日本における医療分野スペイン語教育について、教材・授業内・授業外での教授者の役割という点から考えたい。

#### 3.1 専門分野外国語教育

本稿では、ある外国語における特定分野の使用を目的とした教育について、「専門分野外国語教育」という表現を使用しているが、この名称が一般に定着しているわけではない。日本ではその研究が比較的すすんでいると思われる英語についても、web上で検索したところ、「特別目的英語」、「専門英語」、「専門分野英語教育」、「分野別英語」<sup>5</sup>など、複数の名称が確認される。これらは、English for Specific Purposeの日本語訳と考えられるが、その頭文字をとった「ESP」も使用されている。スペイン語では、español para/con fines específicos (EpFE/EFE)と呼ばれ、日本語では、「特殊領域スペイン語」(江澤 2007)、「特定領域スペイン語」(愛知県立大学 2008b)が使用されている。これらを総称して、「専門分野外国語教育」とここでは呼ぶことにする。

専門分野外国語教育について、どのような分野があるだろうか。よく知られているのは、「ビジネス英語」に代表されるように、商業関係分野である。それ以外に「時事〇〇語」もあるだろう。少し前までは、医学における外国語は、日本ではドイツ語が主流であり、これは「医学ドイツ語」と呼ばれているようである。同様に「医学英語」「医学フランス語」もある。

スペイン語についてはどのような分野があるだろう。2000年にスペインの教育スポーツ省(Ministerio de Educación y Deportes)により開催された「専門分野スペイン語国際学会」(Congreso Internacional de Español para Fines Específicos)での研究対象分野を確認すると、español comercial/ español de negocios「商業スペイン語」、español técnico「科学技術スペイン語」、español jurídico「法律スペイン語」、español para arquitectos「建築スペイン語」、español para turismo「観光案内スペイン語」が、あげられる<sup>6</sup>。ほかにも日本では、相澤他(2002)『土木技術者のためのスペイン語辞典』、小波津他(2005)『教育現場のスペイン語』、糸

<sup>5</sup> 日本ESP協会は、general Englishを「一般目的英語」、ESPを「分野目的別英語」と呼んでいる(<http://jaesp.org/index.htm>)。

<sup>6</sup> 2000年第1回、2003年第2回、2006年第3回が開催されている。  
(<http://cvc.cervantes.es/ensenanza/ciefe/default.htm>)



魚川他『医療系のためのスペイン語』(2007) など専門分野スペイン語に関連した書籍が出版されており、「土木技術者のためのスペイン語」は *español para ingenieros civiles*、「医療系のためのスペイン語」は *español para los servicios médicos* という表現が使用されている<sup>7</sup>。

「医療分野ポルトガル語スペイン語講座」も、特定の分野におけるスペイン語によるコミュニケーション能力の向上を扱うという意味で「専門分野スペイン語教育」の一部である。しかし、たとえば、「商業スペイン語」「科学技術スペイン語」「観光案内スペイン語」などが、研究や職業上の目的を達成するための学習者の個人的ニーズに応えるという性質が強いといえるのに対し、本講座の場合、学習者の意欲から受講が希望されるが、医療現場の現状や、日本語運用能力が十分でないポルトガル語・スペイン語話者住民の存在に基づく社会的ニーズに応える性質が強いと言えよう。このことは、この分野におけるポルトガル語・スペイン語教育のあり方、講座の内容、講座主催者・受講者に求められる資質・教授者の役割にも大きく影響すると考えられる。

### 3.2 医療分野ポルトガル語スペイン語講座 2007 年度「スペイン語入門」

#### 3.2.1 クラスの構成

受講者は、応募者のなかから一部抽選で決まる。受講者を募集する際、ポルトガル語・スペイン語各クラス 15 名を定員とし募集したが、ポルトガル語 72 名、スペイン語 63 名と、予想をはるかに上回る応募数であった。そのため、最終的に、ポルトガル語 22 名、スペイン語 20 名までが認められた<sup>8</sup>。応募者の職種は、医療系がもっとも多く、ポルトガル語で 28 名、スペイン語で 15 名であった。講座が毎週木曜日朝 10 時 30 分からにもかかわらず、現職も多い<sup>9</sup>。この点も当初の予想とは少々異なっており、現場のニーズがいかに大きいかを結果として示すこととなった(愛知県立大学 2008a, 22-24)。

2007 年度の各言語のクラス構成は次のようになっている。

ポルトガル語入門 22 名 講師 + ティーチングアシスタント

スペイン語入門 20 名 講師 + ティーチングアシスタント

各クラスにティーチングアシスタント 1-2 名が配置され、授業を補助し、さらに授業の記録をとる。授業の記録は 2 日以内に受講者のみがアクセスできる web ページに置かれる。欠席した受講者には授業内容の確認のため、その他の受講者には復習のために利用されている。

#### 3.2.2 日本でのスペイン語使用を考えた教材

1990 年以降、大学非専攻課程でのスペイン語学習教科書を扱う出版社が増え始め、ここ数年は、それらの出版社から毎年 2、3 冊ずつ新しい教科書が出版されている。しかし、専門分野スペイン語教育用の教科書として作成された教材はわずかである。

本講座で採用されたテキストは、日本における医療分野スペイン語教育のなかではおそらく最初の教科書<sup>10</sup>となった、糸魚川他 (2007)『医療系のためのスペイン語』(私家版)である<sup>11</sup>。

<sup>7</sup>小波津(2005)のスペイン語による書名は、*Manual fácil japonés-español para los hispanohablantes y centros educativos en Japón* とあり「教育現場のスペイン語」という分野を指す表現にはなっていない。web で検索したところ、*español para educadores* が確認された。また、「医療分野スペイン語」については、*español para cuidados de salud* なども使用されている。

<sup>8</sup>その後、ポルトガル語では 1 名辞退があった。

<sup>9</sup>ただし、木曜日に設定したのは、医療機関の休業日を考慮してのことである。

<sup>10</sup>日本以外では、スペインで出版されている教材である、Gómez de Enterría (1994)が知られている。その他、アメリカ合衆国では Ríos and Fernández Torres (2004)がある。スペインで出版されている医療分野スペイン語教材は、中級以上のスペイン語力を有する学習者を対象としている。

<sup>11</sup>本書は、講座が始まる直前に完成したこともあり、講座のために作成したと誤解されることがある。著

著者および使用者の立場から、本書について紹介する。

本書自体は、入門から中級のスペイン語を扱っており、医療系の専門学校・短大・大学、社会人向けの市民講座など、幅広い使用を想定し作成されている。具体的には、文法説明の簡略化と学習項目の限定をはかる<sup>12</sup>一方、ドリル的な単純な練習問題のほか、Un paso más という応用問題のページを設けている。そこでは、特に聞き取りと読解を組み合わせた課題を提供し、レベルアップをはかれるようになっている。

日本におけるスペイン語教育が一般にそうであったように、日本で出版されているスペイン語学習教科書も一般的に、日本以外でのスペイン語使用を想定し、作成されている。スペイン語が履修できる看護系の短期大学や学部でも、中南米諸国における医療活動を想定し、スペイン語科目を開講している場合がある。一方、本書は、日本の医療機関でのスペイン語使用を想定しており、次のような工夫をしている。

- 1) 日本で暮らすスペイン語圏出身者では、南米出身者が大半を占めるため、南米の使用にできるだけ近づけるようにしている。たとえば、主格人称代名詞 2 人称複数には、ustedes を使用している。
- 2) 練習問題の一部に、学習者が生活する自治体における外国籍住民が抱える問題について少しでも意識的になれるような課題を設定している。たとえば、「あなたの住む県や市町村の外国籍住人人口を調べて、その特徴を考えてみましょう」(第 1 課 Ejercicios 1-4, 12 ページ)  
「あなたの住む市町村に、医療通訳者がいる医療機関があるかどうか調べてみましょう」(第 6 課 Ejercicios 6-3, 42 ページ)
- 3) 医療保険・入院誓約書・ドメスティックバイオレンスなどについて、すぐに使える表現が、練習問題や「基本的な語彙」に含まれている。

以上のように、実践を重視しつつも、それぞれの課をダイアログ(1 ページ)・文法(2 ページ)・練習問題(3 ページ)という構成にし、既存の教科書の形式を継承している。語彙や場面設定を医療分野にしているが、既習事項で構成されたダイアログ、動詞活用や構文を練習するためのタスク、ダイアログを応用したペアワーク、余裕があれば長めの聞き取り・読解の応用問題に挑戦するというなじみのある形式にすることで、それまでの外国語学習方法(ほとんどの場合は英語学習)を応用することが可能である。そのことにより、入門レベル・専門分野であっても学習に入りやすくなるのではないかと考えられる<sup>13</sup>。

このように既存の形式を使用することは、学習者だけでなく、教授者にとっての使いやすさという点からも重要であると考え。それまで「一般スペイン語」(español general)しか担当したことのない教授者が、看護系の学部でスペイン語を担当する機会を得た場合、看護学の専門知識を備えていないことに不安を覚えることは大いに想像できる(Sabater 2000)。教材開発がはじ

---

者の 1 人が看護短大でスペイン語を教えた経験があったこと、スペイン語圏出身者の増加と公共空間におけるスペイン語による情報提供などに関心を抱いていたことから、2005 年に着手した。写真撮影、版下の作成、音声録音においてたくさんの人の協力を得ることができた。この場を借りて再度感謝したい。

<sup>12</sup> たとえば、これまでのスペイン語教科書では、指示詞は文法項目にあげられ、一覧表として提示されているが、「こ・そ・あ」を 3 課にわけ、ダイアログ中の語彙として扱っている。また未来形は入れず、「ir a 不定詞」で代用している。

<sup>13</sup> 2006 年度愛知県立大学「教科教育法(スペイン語Ⅲ)」の授業で 2007 年 1 月 25 日実施した「スペイン語テキスト」(堀田 2007)において、スペイン語教科書について議論の場をもうけた。これまで使用した教科書を 1 冊選び、その教科書についてコメントすることが前週に指示されており、当日は、学生がコメントし、その後討論をおこなった。そのなかで、次のような意見があった。「スペインで出版されている教科書は絵や写真が多くカラフルで楽しそうだが、どこから手をつけてよいかわからない。日本で出版されている教科書は、高校までの英語の学習方法を応用でき、入りやすかった」



まったばかりの分野であるため、そのような不安をできるだけ取り除き、より多くの人が使えるような構成にする必要があった<sup>14</sup>。

2007 年度講座「スペイン語入門」では本書の第 6 課（現在形の不規則活用、目的格人称代名詞）まで、2008 年度「スペイン語中級(1)」ではそれを引き継ぎ、第 11 課（完了、過去、命令法）まで学習している。第 12 課（接続法）は、委託事業の最終年度 2009 年度開講予定の「スペイン語中級(2)」で扱う予定である。

2007 年度講座「スペイン語入門」では、次の項目を扱っている。

	学習項目(文法)	達成項目(語彙、表現)
導入	文字・発音・アクセント・主格人称代名詞・数詞	あいさつ、名前とその綴り・誕生日・体調の返答
第 1 課	動詞 ser、動詞 estar	診察カードの作成
第 2 課	直説法現在規則動詞、tener	病状を尋ねる、薬の服用の説明
第 3 課	1 人称単数不規則動詞、直接目的格人称代名詞	日課や仕事をかたる
第 4 課	語幹母音変化動詞、動詞 ir、不定詞をとる動詞	指示をする、健康診断の説明、糖尿病
第 5 課	間接目的格人称代名詞、gustar 型動詞、疑問詞	症状を尋ねる
第 6 課	過去分詞、現在完了、不定語・否定語	経験をかたる、病院内の組織

### 3.2.3 学習者の学習経験への配慮と効率性

専門分野外国語教育は、学習言語をある程度習得している学習者を対象としていることが一般的であるのに対し、本講座はまったくの入門から始めているという点でも、新しい試みである。

2007 年度実施の「スペイン語入門」では、日本でのスペイン語教育経験が長いスペイン語母語話者に講師を依頼した。講師は授業時間中日本語をほとんど使用せず、必要な場合は、ティーチングアシスタントが補助するという教授法<sup>15</sup>がとられた。そこには次のような利点が考えられる。

- 1) 授業のなかで、日本語の運用能力が十分でない人と、さまざまな方法でのコミュニケーションを経験できる(日本語が通じないコミュニケーションに慣れる)。
- 2) 講師が、医療機関で外国人がかかえる問題を経験からかたることができる<sup>16</sup>

2007 年度については、受講者のモチベーションが非常に高く、熱心で、クラスの雰囲気も良好であった。しかし/したがって、講座のほぼ半分というところで、受講者から、日本語による文法説明が要求され、急きよ隔週で 30 分日本語による補講を実施することになった。このことは、スペイン語を学習し始めた入門・初級のレベルでは、スペイン語の文法や構造をある程度日本語で理解することが、学習者にとってよりよい方法と考えられたということを示している。また、

<sup>14</sup> 当然、実践を考えた場合、本書だけでは不十分で、本講座のなかでは副教材としてプリントや視聴覚教材が講師によって準備・使用されている。愛知県立大学(2008a, 57-68)を参照。

<sup>15</sup> 「コミュニケーション言語教授法」(リチャーズ&ロジャーズ, 2007, 194-222)、(フィノキアール&ブルムフィット, 1987) の特徴を多く含んでいる。

<sup>16</sup> ただし、一個人の経験であり、それがすべてではないことに注意しなければならない

次の理由も考えられる。

- 1) 学習者のそれまでの外国語学習方法が、文法に重きをおいたものであった
- 2) 学習言語だけによる授業を受けた経験がない
- 3) 教授者の発話すべてを理解しなければならないと考えられている

1)・3) は、伝統的な日本の外国語授業で求められてきたことである。2)についていえば、学習言語だけによる授業を受けた経験がなければ、そのような授業では、過度の緊張や、不安を覚える可能性もある。この3点は、どれも関連しており、学習者のそれまでの外国語学習経験と関わりがある。東京大学で5年間スペイン語を担当していたカルロス・ルビオ氏は、次のように述べている。

「日本では日本人学生は自分たちがなじんでいる教育方法でスペイン語を学んでいる」

「教室にいるのはほとんど日本人の学生、日本語で書かれた教科書を使い、多くの場合日本人の教師が教えるという環境の中で、学生はリラックスして勉強できます。それはときにはよいことです」(ルビオ 2008, 23)

さらに3)について、それまでの学習経験のなかで、教授者の説明にしっかり耳を傾け、それをほぼすべて理解するような授業の受け方をしていた学習者は、教授者の言っていることは、「すべて理解しなければならない」という不安にさらされるだろう。そもそも、学習し始めた段階で、母語話者の説明がすべて理解できるはずはなく、そのことを承知で講師は授業をすすめているが、そのような教授法・学習法の経験がなければ、快適に授業時間を過ごすことは難しくなるだろう<sup>17</sup>。実際受講者と話したところ、講師の言っていることについて、「こういうことだろう」となんとなくわかるが、それが本当に正しいのか不安になるということだった。本講座が対象としているのは社会人であり、年齢にも幅がある。外国語学習から何年も遠ざかっているとしたら、そのような不安を抱くことは理解できる。先に引用したルビオ氏は、次のようにも述べている。

教育法は容器に合わせて形を変える水のようなものであるべきだ(同上、22)

この補講の実施により、教授者側の負担が大きくなったとはいえ、受講者みずからが学習に不足しているものに気づき、要求していることから、積極的な態度で学習にのぞんでいるとも評価できる。

### 3.2.4 一般スペイン語教育との違い

専門分野外国語教育では、受講者が教授者より専門分野に精通していることが多く、教授者と学習者の立場が一般スペイン語と異なるということは想像できる。一般スペイン語では、入門や中級レベルにおいて、教授者より学習者が学習内容についてより深い知識を持っていることはまれである。一方、本講座では、語学講師は医療分野について専門的な知識を備えておらず、学習者との協力関係のもとに授業がすすめられる。そこでは教授者がスペイン語学を、学習者が医療分野を担当するという役割分担がうまれる。教授者が「正解」を提示するのではなく、学習者とともに答えを探ったり、学習者に教えられるという場面も多々あるだろう。

<sup>17</sup>なお、2007年度の「スペイン語入門」語学授業の満足度は、63%が「大変満足」、37%が「まあ満足」であった。2008年度「スペイン語入門」「スペイン語中級(1)」では、90分を日本語母語話者による授業、90分をスペイン語母語話者による授業とした。

とくに専門用語については、日本語であってもわからない、辞書を調べても記載されていない場合があり、「〇〇はスペイン語でどう表現しますか」という質問に対し「××と言います」と即答できることはほとんどないが、「こんな作業をしたらどうでしょうか」という方法を共有することはできる<sup>18</sup>。学習者にとっては、教授者はあくまでも「先生」であり、質問すれば正解が返ってくると思われがちであるので、これを初回の時点でお互いが了解する必要がある。

この点については、先に引用した本事業の概要にも、「教授者から一方的な講義のみでなく、グループ学習やロールプレイングを取り入れた能動的な学習ができる教育プログラムとする」とあり、「受講者が身に付けるべき能力」についても「今後の語学力向上のための継続学習方法を身につける」(同上, 6)ことが講座の達成目標の1つにもなっている。

### 3.3 社会的認知と需要の拡大

本講座は、医療現場での支援に必要なスペイン語またはポルトガル語でのコミュニケーション支援能力を身につけるために、語学授業だけでなく、前述したように、「基礎知識を学ぶ」という講義を設定しており、この2つの科目を受講することが義務となっている。さらに公開講演会等を開催し、その出席も受講時間に含まれる。この公開講座やシンポジウムという企画は、本講座が特定の受講者を対象とした閉じられた事業ではなく、広く社会にもつながっているものであることを示している。これらの活動を通して、この地域における外国人医療の現状や、いまだ整っていない医療通訳認定制度の問題を伝えていく役割を果たしている。2007年度・2008年度に実施した公開事業企画を紹介する<sup>19</sup>。

2007年10月11日公開講演会「地域コミュニケーション支援の必要性」講師:水野真木子氏(千里金蘭大学人間社会学部準教授)

2008年公開講演会全3回<sup>20</sup>

6月7日「多文化・多言語社会とは」講師:津田守氏(大阪大学グローバルコミュニケーションセンター教授)

6月28日「地域におけるコミュニケーション支援ースペイン語相談・通訳の現場から」講師:村松紀子氏(医療通訳研究会代表)

8月2日「中南米のことばと医療現場」講師:奥澤英一氏(独立行政法人労働者健康福祉機構研究情報部副部長)

2008年11月1日公開シンポジウム「医療通訳をめざして、技能養成と地位ーポルトガル語とスペイン語ー」シンポジスト:伊東浄江氏(NPO法人トルシーダ代表)、松野勝民氏(MIC かながわ副理事長)、住田育法氏(京都外国語大学ブラジルポルトガル語学科長)、伊藤美保氏(医療通訳者ネットワーク東海)、寺崎英樹氏(スペイン語技能検定中央委員長)

本講座修了後、身につけた知識をどこでいかせるか、という問題があるものの、事業全体か

<sup>18</sup> 執筆者は、2008年度「スペイン語中級(1)」の90分を担当した。そのなかで、「アレルギー」「頸椎椎間板ヘルニア」についての文章を扱った。学習者を4-5人ずつのグループに分け、すべてのグループに医療関係者が必ず1人入るようにした。医療用語を抜き出し、日本語ではどのように言うかという作業をした。最初の「アレルギー」を扱った際には、スペイン語-日本語辞書を頼りに作業が始ったが、「頸椎椎間板ヘルニア」の時には図解の医療事典、英語による説明を持参する受講者もいた。前もってwebの検索エンジンで調べている受講者もいた。

<sup>19</sup> 詳細は、<http://cer.aichi-pu.ac.jp/com-medico/index.html>に掲載。なお、講師の所属・役職は実施時のものである。

<sup>20</sup> 各回において、学外講師による講演のほか、愛知県立大学スペイン学科教員が「ポルトガル語・スペイン語」という題目で短い講演を行っている。

らみた場合、その問題を不問に付しているわけではなく、人材の養成を行いながら、その人材が活躍できる場の創造も視野にいたした事業となっている。また、ポルトガル語およびスペイン語によるコミュニケーション支援の必要性を訴えることは、ポルトガル語母語話者・スペイン語母語話者の生活環境の改善につながると考えられるが、それだけではなく、現在、これらの言語を学習している大学生の、学習言語を使用する機会を増やすことや、その能力をいかせる空間をつくりだしていく活動に、すなわちスペイン語・ポルトガル語の需要の拡大にもつながる可能性を秘めている点を強調したい。

#### 4. おわりに

本稿では、愛知県立大学が2007年度から実施している「医療分野ポルトガル語・スペイン語講座」の2007年度「スペイン語入門」を中心にとりあげ、専門分野スペイン語教育のあり方・教授者の役割について考えてきた。本講座は、社会人を対象とし、日本の医療現場での使用を前提とした、実践的なコミュニケーション能力を身につけるという点で、従来のスペイン語教育がもつ背景や目的と異なっている。また、医療通訳認定制度など、習得した知識を十分に活用できる社会的受け皿がないという点で、他の専門外国語教育と異なる。これらのことを断った上で、本講座からみえてくる教授者の役割、または、教授者に求められているものは、次のようにまとめることができる。

- 1) 教材作成---教材作成も教授者にとって重要な役割である。本講座は実践重視ではあるが、入門者を対象としていることから、従来の形式を継承しながら、新しい視点を取り入れていくことで、学習者が取り組みやすい教材にすることが求められる。医療分野については教材開発が始まったばかりの段階であるため、同僚である教授者が抱えるであろう専門分野外国語教育に対する不安にも配慮が必要である。
- 2) 授業内---すぐに使える実践的なスペイン語能力を身につけることが求められるが、学習者の外国語学習歴を考慮し、教授法について柔軟な対応が求められる。専門分野外国語教育では、専門知識について、学習者との役割分担・協力体制により授業がすすめられる。
- 3) 授業外---語学以外の専門家とも連携し、学習者が習得した知識をいかせる空間を広げていく

英語以外の外国語教育が縮小されるなかで、これからのスペイン語教育・ポルトガル語教育にさまざまな可能性を提供できる要素を持っている本講座に関わることができたことは、光栄であり、今後も積極的に関わっていきたい。本稿もまた、スペイン語教育に何らかの形で貢献できれば幸いである。

#### 参考文献

- 相澤正雄、青砥清一 (2002)『土木技術者のためのスペイン語辞典』山海社
- 愛知県立大学 (2008a)『平成19年度社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託業務 ポルトガル語スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成講座 成果報告書』
- 愛知県立大学 (2008b)『多文化共生に資する特定領域スペイン語&ポルトガル語教育のための基礎研究(医療分野)』平成19年度教育・研究活性化推進費事業成果報告書 (<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/~hotta-hi/Kaseika2007/index.html>)
- 糸魚川美樹+リディア・サラ(2007)『医療系のためのスペイン語』私家版
- 糸魚川美樹 (2008)「医療分野における異文化間メディアーションおよび通訳講座」(愛知県立大学 (2008a), 186-190 ページ)



- 江澤照美 (2007) 「特殊領域スペイン語-----医療分野スペイン語の語彙について」(SELE07 研究発表ハンドアウト) 愛知県立大学(2008b)
- 小波津由美子他(2005)『教育現場のスペイン語』国際語学社
- 灘光洋子 (2008) 「医療通訳者の立場、役割、動機について -インタビュー調査をもとに-」 『通訳研究』8号、73-95
- フィンキアーノ&ブラムフィット (織田稔他 訳)(1987) 『言語活動中心の英語教授法 -F-Nアプローチの理論と実際-』大修館書店
- 堀田英夫 (2007)『遠隔通信とe-learningを組み込んだスペイン語教育用の教材研究』平成17-18年度科学研究費補助金(基盤研究(c))研究成果報告書
- 水野真木子(2008)『コミュニティ通訳入門』大阪教育図書
- リチャーズ、ジャック・C & シオドア・S・ロジャーズ (アントニー・アルジェミー他 監訳)(2007) 『アプローチ&メソッド 世界の言語教授・指導法』、東京書籍
- ルビオ、カルロス(2008)「スペインと日本のスペイン語教育-あるスペイン人教師の視点から」東京大学教養学部スペイン語部会『スペイン語教育の挑戦』, 22-26 ページ
- Bermúdez, Kira y otros (2005) *Mediación Intercultural. Una propuesta para la formación*. Editorial Popular, Madrid.
- Calvo, Beatriz y Carmen Llanos (2005) *Cuaderno de léxico jurídico*, CLAVE-ELE.
- Díaz, J. M. & María F. Nadel (2006) *Spanish for Educators*. Mc Graw Hill, New York.
- Gómez de Enterría, Josefa y Sol Gómez de Enterría (1994) *El español por profesiones. Servicios de Salud*, SGEL.
- Ríos, Joanna, and José Fernández Torres (2004) *Complete Medical Spanish*. Mc Graw Hill, New York.
- Sabater, María Lluïsa (2000) “Aspectos de la formación del profesorado español para fines específicos”, en *Actas del Primer Congreso Internacional de Español para Fines Específicos*. Ministerio Educación y Deporte.
- Sales Salvador, Dora (2006) Mapa de situación de la traducción/interpretación en los servicios públicos y la mediación intercultural en la comunidad valenciana y la región de Murcia”, *Revista Española de Lingüística Aplicada*, volumen monográfico, págs.85-109

**Los roles del profesorado del español para fines específicos  
a través de la experiencia del Curso de Idiomas para los Servicios de Salud  
en la Universidad Provincial de Aichi**

Departamento de Estudios Hispánicos de la Facultad de Estudios Extranjeros

ITOIGAWA Miki

Este trabajo tiene por objeto describir sobre el Curso de Idiomas para los Servicios de Salud organizado por la Universidad Provincial de Aichi, por el encargo del Ministerio de Educación, Cultura, Deporte, Ciencia y Tecnología de Japón. En este artículo nos centramos en los roles del profesorado al llevar a cabo, sobre todo, el curso de español.

En 2007 la provincia de Aichi donde se ofrece el curso, ocupaba la segunda posición en número de extranjeros registrados, por detrás de Tokio, y era la primera en número de brasileños, que alcanzaba los 78.000. En cuanto a los hispanohablantes, viven en Aichi unos 10.000, en su mayoría peruanos, que suman 8.500 en esta provincia.

El objetivo de nuestro proyecto es el siguiente:

- 1) Formar personal capaz de facilitar la comunicación entre los latinos que no hablan japonés y el personal sanitario mediante cursos de lengua española o portuguesa.
- 2) Hacer saber a la sociedad la situación en la que están los extranjeros y las condiciones actuales de los servicios médicos a los extranjeros, a través de conferencias y simposios abiertos al público. Así como avanzar hacia la institucionalización de la figura del intérprete y del mediador en los servicios de salud.

Es decir, su objetivo es no sólo ofrecer cursos de idiomas para fines específicos sino también proporcionar a la sociedad oportunidades para reflexionar sobre este tema.

El curso de español que impartimos a través de este proyecto, se diferencia de los cursos generales hechos en Japón hasta ahora en suponer que el uso de español va a tener lugar en el seno de la sociedad japonesa. Por esta razón se exige al alumnado un alto nivel comunicativo. Eso, sin embargo, no significa que tenga que cambiar totalmente de manera de enseñar y de elaborar los materiales didácticos. Es cierto que se necesitan reformas graduales pero éstas deben llevarse a cabo prestando atención a las experiencias que han tenido el alumnado y el profesorado en la enseñanza de la lengua extranjera.

研究ノート

## スペイン語アルファベット表に見る語彙

外国語学部スペイン学科 堀田 英夫



# スペイン語アルファベット表に見る語彙

外国語学部スペイン学科 堀田英夫

## 1. アルファベット表

幼児や児童が、文字を覚えるのに、絵と結びつけて覚える方法がある。文字が絵から派生したことを考えると、それは一つの有効な手段と考えられる。語の頭文字とその語の意味を表す絵からなるポスター形式の文字表を壁に貼り、日常的に幼児の眼に触れさせることによって、知っている語の発音と文字を結びつけ文字を覚えさせる教材は、多くの言語圏に存在する。2008年10月28日から11月5日まで、「新大ファンファーレ」の期間、高等言語教育研究所主催で行った「世界のあいうえお表の展示」では、英語などのラテン文字の系統のみならず、インド文字の系統がインド、タイ、ラオスから、それに漢字、ひらがな、モンゴル文字、ハングルが集まり展示された。

ポスター形式の他にカード形式や積み木のひとつひとつに文字と絵を書いたものもある。文字とともに掲げられた絵は、幼児になじみ深い生き物や道具が選ばれていて、その言語が用いられる土地の文化や自然など風物を反映しているものもあるのではないだろうか。また子供たちになじみのある語として選ばれたものなので、その言語の基礎語彙の一種とも考えられる。

本稿は、スペイン語アルファベットと絵が結びつけられた幼児用の教材のいくつかを、文字と結びつけて掲げられた語について考察するものである。

## 2. アルゼンチン製スペイン語アルファベット表

上記の企画で展示されたスペイン語アルファベット表は、糸魚川美樹氏が2008年9月にスペイン国バルセローナ市で購入したものである<sup>1</sup>。表の右下に“©MUNDO CARTOGRAFICO 2003 Editado por MUNDO CARTOGRAFICO autora: Lic. Normas S. De Paola INDUSTRIA ARGENTINA”とある。和訳すれば、「©ムンド・カルトグラフィコ(地図作成世界社) 2003、ムンド・カルトグラフィコ編、ノルマス・S・デ・パオラ作、アルゼンチン製」となる。ムンド・カルトグラフィコ(地図作成世界社)は、アルゼンチン国ブエノスアイレス市に存在する地図の製作・販売会社である<sup>2</sup>。

以下に、各文字と文字に添えられた語の一覧表を掲げる。

文字	語	絵
A	avión	飛行機
B	bicicleta	自転車
C	casco	ヘルメット
CH	chocolate	チョコレート
D	dados	さいころ(二つ)
E	escalera	脚立

<sup>1</sup> アルファベット表の入手と本稿での考察に利用させていただいたことに対し糸魚川美樹氏に感謝します。

<sup>2</sup> <http://www.mundocartografico.com/index.html>(参照日 2009年1月29日)

F	fresa	イチゴ(複数)
G	guitarra	ギター
H	helicóptero	ヘリコプター
I	impresora	プリンター
J	judía	インゲン豆
K	kiwi	キーウィー
L	libro	本
LL	llave	鍵
M	motocicleta	オートバイ
N	naranja	オレンジ
Ñ	ñu	ヌー
O	órgano	オルガン
P	pizza	ピザ
Q	queso	チーズ
R	reloj	腕時計
S	sartén	フライパン
T	tijeras	はさみ
U	uva	ブドウ
V	velero	ヨット
W	walkman	ウォークマン
X	xilófono	木琴
Y	yogur	ヨーグルト
Z	zanahoria	ニンジン(複数)

文字 E に *escalera* の語と脚立の絵が添えられている。日本語では、「階段」、「はしご」、「脚立」を区別しているが、スペイン語では、*escalera* となる。区別するときには、「はしご」と「脚立」が *escalera de mano* あるいは *escalera portátil*、さらに「はしご」と「脚立」を区別するためには、「脚立」を *escalera de tijera* あるいは *escalera doble* といった言い方で区別することになる。「escalera=階段」<sup>3</sup>とのみ学習した場合には、*escalera* に脚立の絵が添えられているのを見ると違和感を覚えるのではないだろうか。

この表に掲げられていて、スペイン語語彙学習のための『iスペ単!』に掲載されていない語は、*kiwi*, *ñu*, *pizza*, *tijeras*, *velero* (*yate*「ヨット」と「ヨット競技」の意味の *vela*「ヨット、帆」は掲載がある。), *walkman* の 6 語で、その内 4 語が外来語である。

絵にモノが複数個描かれているのが、D の *dados*(さいころ)、F の *fresa*(イチゴ)、Z の *zanahoria*(ニンジン)である。これらのうちスペイン語の語形が複数なのは、*dados* のみである。複数形で「さいころ遊び」として使われる語なので複数形になっているのかもしれない。

CHとLLも他の文字と同じ扱いを受けている。この二つは、1994年のスペイン語アカデミア連合(*Asociación de las Academias de la Lengua Española*)総会での決定により、辞書の配列でそれぞれC、H、Lに分けて配列されることになり、その後の文法書や入門書の多くでは、一文字の扱いを受けていない。文字の発音を考慮した教育的配慮というよりは、伝統継承という点が大きいのではないかと考えられる。文字の発音ということを考慮するのであれば、Cの/k/と/s/(あるいは/θ/)、Gの/g/と/x/を考慮する必要があるからである。

<sup>3</sup> 『iスペ単!』には、*escalera* は「階段」と、*escalera automática*[*mecánica*]の「エスカレーター」のみで、「はしご」と「脚立」は掲載されていない。

アルゼンチン製ではあるが、語の地域差は見られない。アルゼンチンには、イチゴを表す語に **frutilla** があるが、この表では、スペイン語圏広くに通用する **fresa** の語が書かれている。スペインで販売されていることが理解できる。

## 2. メキシコ製スペイン語アルファベットカード

メキシコ国グアナファト市で 2009 年 1 月に筆者が購入したメキシコ製アルファベットカードを見る。54 枚のカードと、9 枚の表でセットとなっていて、表は、配列がランダムな 4 枚×4 枚 = 16 枚分のカードと同じ印刷がしてある。包装用の紙片に、作者 **José de Jesús(sic) Galaviz León** とあり、**PRODIDAC** という会社名と思われる記載とメキシコ連邦区の住所が記載されている。1 枚のカードに、**Lotería de: ABECEDARIO ESPAÑOL-INGLES**(スペイン語英語アルファベット表ビンゴ/くじ)とある。カードと表を使ってビンゴ・ゲームをするようになっていると思われる。アルファベットの大文字と小文字で別々のカードとなっていて、それぞれのカードに文字と通し番号、スペイン語の語とそれを表す絵、さらにアルファベットの英語による名前が、スペイン語表記に準じた表記で示されている。英語アルファベットにも慣れ親しむことができるという販売促進の意図が感ぜられる。以下、掲載のスペイン語単語と絵について考察する。

	大文字	絵		小文字	絵
A	avión	飛行機	a	ángel	天使
B	banco	丸椅子(背もたれなし)	b	ballena	クジラ
C	caracol	巻き貝	c	casa	家
D	dinosaurio	ディノサウルス(恐竜)	d	durazno	桃
E	elefante	象	e	estufa	オーブン&コンロ
F	foca	アザラシ	f	foco	電球
G	girasol	ヒマワリ	g	gusano	青虫
H	hongo	キノコ	h	huevo	卵
I	insecto	昆虫	i	igloo (sic)	イグルー
J	juguete	熊のぬいぐるみ	j	jarrón	壺
K	koala	コアラ	k	kiosko (sic)	(公園の)あずまや
L	lámpara	電気スタンド	l	lupa	虫眼鏡
M	muñeca	(女の子の)人形	m	mano	手
N	niño	子ども	n	nopal	サボテン
Ñ	--		ñ	--	
O	oso	クマ	o	oreja	耳(たぶ)
P	pato	アヒル	p	paleta	棒つきキャンディー
Q	queso	チーズ	q	queso	チーズ
R	reloj	目覚まし時計	r	rueda	車輪
S	silla	椅子(背もたれ付き)	s	sapo	カエル
T	tortuga	カメ	t	tren	列車(新幹線の絵)
U	uña	爪	u	uva	ブドウ
V	vaca	乳牛	v	voleivol (sic)	バレーボール
W	--		w	--	
X	--		x	--	
Y	yunke (sic)	金敷、金床	y	yo-yo	ヨーヨー

Z	zorro	キツネ	z	zanahoria	ニンジン
---	-------	-----	---	-----------	------

横線を引いた Ñ, W, X の文字のカードには語と絵が書かれていない。文字と英語文字名のみの記載である。もちろん Ñ には英語文字名もない。

いくつかの語の綴りが、スペイン語正書法にあわない表記がされている。アカデミア辞書(22 版、web 参照)では、*iglú*(イグルー)、*quiosco* あるいは *kiosco*(公園のあずまや)、*voleibol*(バレーボール)、*yunque*(金敷、金床)がアカデミア辞書に掲載されている語形であるが、カードにはそれぞれ、*igloo*、*kiosko*、*voleivol*、*yunke* と表記されている。これらのカードは、スペイン語正書法の教育用には好ましくない。

メキシコ製であるがゆえの語の選択がいくつかある(図参照)。文字 B の *banco* に背もたれのない丸椅子の絵は、スペインのスペイン語からは奇異に感じさせる。スペインで、*banco* は「ベンチ、長椅子」で、丸椅子は *taburete* である。西和辞典の『クラウン西和』(2006 年第 3 刷)、『プエルタ』(2006 年初版)、『西和中 2 版』(2007 年第 1 刷)とも *banco* に、この語義の記述がない。CLAVE(3a edición, 1999)には、“9. En zonas del español meridional, *banqueta* o *taburete*”(南のスペイン語(=アンダルシアと中南米)で、スツールあるいは丸椅子)とある。文字 d の *durazno*「桃」は、中南米の語形であり、*melocotón* が一般的である(『クラウン和西』:桃)。文字 e の *estufa* には、オープン&コンロの絵が添えられている。この語はスペイン等でストーブを意味する。『プエルタ』(2006 年初版)には、「5. (中南米)コンロ、レンジ(=*cocina*)」と記述がある。文字 f に電球の絵と *foco* の語があるのもメキシコならではである。スペインなら電球は *bombilla* である(『クラウン和西』:電球)。文字 n の *nopal*(サボテン)はメキシコで食用なので、*cacto* や *cactus* よりもなじみのある語として選ばれていると考えられる。文字 p の *paleta* は、『プエルタ』に「9. (カリブ)ペロペロキャンディー」、『クラウン西和』に「7. (中米)棒つきキャンディー」の記述がある。スペインなら、*caramelo* あるいは商品名の *chupa chups* であろう。

『i スペ単!』に掲載されていない語は、*banco*(「銀行」の訳では掲載されている)、*caracol*、*dinosaurio*、*estufa*、*foca*、*foco*、*gusano*、*hongo*、*insecto*、*igloo/iglú*、*jarrón*、*lupa*、*muñeca*(「手首」の訳では掲載されていて、*muñeco*「人形」もある)、*nopal*、*paleta*、*sapo*、*yunke/yunque*、*yo-yo* の 18 語である。

### 3. まとめ

アルファベット表に掲げられた語は、子供になじみのある語として選ばれたもので、その言語の基礎語彙の一種である。外国語として学ぶ場合の基礎語彙と異なるものではあるが、学習がある程度進んだ段階で、その言語の使用目的によっては、覚えておく必要のある語であろう。例えばその言語圏の子供と関わるような場合には、必要になってくる語彙である。

語と絵が結びつけられているので、日常的な語のその地域での意味を知るには良い資料となりうる。今後も、スペイン語圏各地で作成されたアルファベット表を収集し、さらに考察していきたい。

### 引用文献

上田博人他編『プエルタ 新スペイン語辞典』研究社(2006 年初版)  
 スペイン語教育研究会編『i スペ単! 頻度で選んだスペイン語単語集(練習問題つき)』(朝日出版社、2006)

高垣敏博監修『西和中辞典 第2版』小学館(2007年第1刷)  
原誠他編『クラウン西和辞典』三省堂(2006年第3刷)  
Rubio, Carlos 他編『クラウン和西辞典』三省堂(2005年第2刷)  
Maldonado González, Concepción et al.(1999) *CLAVE Diccionario de uso del español actual* (3a edición), Ediciones SM, Madrid.  
REAL ACADEMIA ESPAÑOLA(2001), *DICCIONARIO DE LA LENGUA ESPAÑOLA - Vigésima segunda edición* (<http://www.rae.es/rae.html>  
参照日 2009年1月29日、30日)

## 研究員の業績一覧

言語教育に関する研究および言語教育の基礎になる言語、文化、社会の研究の業績一覧(著書、論文、研究ノート、書評、語学テキスト、教材、辞書、報告書など)を、外国語学部と文学部英文学科の先生方に提出を呼びかけ集計したものを掲載する。データは当研究所の学内向けウェブページ

<http://info.for.aichi-pu.ac.jp/gengoken/>

にもエクセルファイルで掲載している。

「本学専任の各教員やグループ(あるいは学外研究者との共同研究)によって行われている言語教育に関する研究についての情報及び成果の収集と共有化を図る。」という本研究所の事業の一つとして集計し、公開するものである。図書館やウェブ上で参照できるものとしての業績に限ったため、口頭による講演や発表、それに印刷中のものは掲載していない。今後の共同研究や個別の研究、および語学教育実践の参考にしていただければと願っている。

最近5カ年間に発表されたもので、提出いただいた方の氏名の五十音順、その中で現在から順に発表年次を過去にさかのぼり並べてある。項目は、

【氏名、題名/論文名、著者名(3名程度まで、それ以上は略)、出版社/掲載誌名、(巻、最初と最後の頁)、発表年(西暦)】である。

呼びかけから締切までの期間が短かったため、まだ提出のない先生方もいる。来年度以降、1年分ごとを追加すると同時に未掲載の業績も掲載していく予定である。

氏名	題名 / 論文名	著者名 (3名程)	出版社/ 掲載誌名	(巻、頁)	発表年 (西暦)
石野好一	『フランス語—文法からコミュニケーションへ』 + 『教授用ガイド』	石野好一	弘学社		2008
石野好一	『どこにいろの?』 + 『教授用資料』	石野好一, 大久保政憲, 山崎吉郎	朝日出版社		2008
石野好一	『フランス語を知る, ことばを考える』	石野好一	朝日出版社		2007
石野好一	《 Quelques notions fonctionnalistes et l'antéposition des pronoms en français. 》	石野好一	『人間言語の本質的特性に関する理論言語学, 機能言語学, 言語科学による統成的研究』平成 15-18 年度文部科学省科学研究費報告書	53-62	2007
石野好一	「フランス語を知る」 (1~28) (連載)	石野好一	朝日出版社サイ ト『Asahi e-text フランス語 web 授業支援サービ ス』		2006- 2007
石野好一	《 Orientation sémantique et ordre des mots : inversion de l'effet de sens dans le discours. 》	石野好一	『人間言語の本質的特性に関する理論言語学, 機能言語学, 言語科学による統成的研究』平成 15-18 年度文部科学省科学研究費報告書	86-93	2006



石野好一	《Sur les expressions onomatopéiques de l'émotion en japonais.》	石野好一	『Cognition et émotion dans le langage』(慶応出版)	105-115	2006
石野好一	「フランスにおけるディスプレイ研究とヴァインリヒのテクスト文法」	石野好一	『テクスト文法が拓く地平』(日本独文学会研究叢書)	79-92	2005
石野好一	「動詞のココロは無限大」(1~12) (連載)	石野好一	『ふらんす』(白水社)		2004-2005
石野好一	《Fonction de l'article indéfini « de » dans le syntagme « de longs cheveux » et de l'antéposition de l'adjectif en français : le point de vue du fonctionnalisme et de la théorie de l'information.》	石野好一	『人間言語の本質的特性に関する理論言語学, 機能言語学, 言語脳科学による統一的研究』平成15-18年度文部科学省科学研究費報告書	72-85	2004
石野好一	「(新刊紹介) Yvette Galet (1998) : La pratique de la langue : le français en question(s). P. U. de Rennes.」	石野好一	『フランス語学研究第38号』(日本フランス語学会)	74-75	2004
糸魚川美樹	『ケ・テ・パサ〜初級スペイン語、看護・医療形語彙を中心に〜』	高橋寛二、 糸魚川美樹他	朝日出版社		2009
糸魚川美樹	『医療系のためのスペイン語』	糸魚川美樹、 リディア・サラ・カハ	私家版		2007
糸魚川美樹	『遠隔通信と e-learning を組み込んだスペイン語教育用教材研究』	堀田英夫 糸魚川美樹 塚原信行	平成17-18年度科学研究費補助金研究成果報告書		2007

糸魚川美樹	『新感覚スペイン語のエッセンス』	堀田英夫 塚原信行 糸魚川美樹	朝日出版社		2007
糸魚川美樹	「公共圏における多言語化-愛知県の事例を中心に」	糸魚川美樹	『社会言語学』 『社会言語学』 刊行会、	第6号、 45～59 頁	2006
糸魚川美樹	研究ノート「愛知県における公共的空間のスペイン語使用概観」	糸魚川美樹	『Hispanica』日 本イタリヤ学 会	第51 号、171 ～176	2006
糸魚川美樹	「差別論をかたることば - 『女性学年報』のころろみを例に」 (第 8章)	糸魚川美樹	『ことば/権力/ 差別』ましこひ でのり編、三元 社	193～ 212頁	2006
糸魚川美樹	「ジェンダー化された言語のゆくえ」	糸魚川美樹	『社会言語学』 『社会言語学』 刊行会、	第5号、 85～103 頁	2005
糸魚川美樹	『改訂版・ミラ』	糸魚川美樹、 二村久則、 水戸博之	同学社		2005
大森裕實	「視覚認知型英語聴覚イメージの効果-スピーチ・クリニクの実践 的研究報告-」	大森裕實	『中部応用言語 学研究会/言語 研究と英語教 育』	第8号 pp. 27-43.	2008
大森裕實	「書評 Henry Hitchings, Dr. Johnson's Dictionary: the explanatory story of the book that defined the world, 2005」	大森裕實	『JACET 中部支 部紀要』	第6号 pp. 63-71.	2008
大森裕實	「齋藤秀三郎『熟語本位 英和中辞典』の再評価-Idiomologyと前 置詞記述にみる先駆性-」	大森裕實	『JACET 中部25 周年記念論文 集』	pp. 137-151	2008
大森裕實	『視覚認知型英語音声聴覚イメージを利用した効果的学習モデルの 研究開発Ⅱ』	大森裕實	〈2007年度愛知 県立大学教育研 究活性化推進費		2008

大森裕實	「フィロロジスト Dr. Johnson の言語観」	大森裕實	研究報告書)	第40号 pp. 1-22.	2008
大森裕實	「書評 Jennifer Jenkins, The Phonology of English as an International Language, 2000」	大森裕實	『JACET 中部支部紀要』	第5号 pp. 57-63.	2007
大森裕實	『視覚認知型英語音声聴覚イメージを利用した効果的学習モデルの研究開発 I』	大森裕實	(2006年度愛知県立大学教育研究活性化推進費研究報告書)		2007
大森裕實	「概念的範疇の言語化にみる機能と形」	大森裕實	『言語文化と言語教育の精髓』大阪教育図書	pp. 47-61.	2006
大森裕實	「書評 Jack Lynch and Anne McDermott (eds.), Anniversary Essays on Johnson's Dictionary, 2005.」	大森裕實	『JACET 中部支部紀要』	第4号 pp. 63-71.	2006
大森裕實	「アメリカ英語にみる初期近代英語の諸特徴」	大森裕實	『中部応用言語学研究会/言語学研究と英語教育』	第7号 pp. 9-27.	2005
大森裕實	「書評 David Crystal, The Language Revolution, 2004.」	大森裕實	『JACET 中部支部紀要』	第3号 pp. 69-77.	2005
大森裕實	「書評 福田陸太郎 (監修) / 東京成徳英語研究会 (編著) 『OEDの日本語 378』 2004.」	大森裕實	『JACET 中部支部紀要』	第2号 pp. 45-54.	2004
高阪香津美	「多文化共生時代の外国語教育(1) - 公立高校におけるポルトガル語教育のいま -」	高阪香津美	『AnaisXXXVII』日本ポルトガル・ブラジル学	105-117	2007

高阪香津美	「ブラジル人の子どもたちが置かれている教育環境：Sさんのポルトガル語教室を事例として」	高阪香津美	『言語文化共同研究プロジェクト2007 多文化共生と言語教育』大阪大学大学院言語文化研究科	41-48	2008
高阪香津美	「外国人生徒の学校教育環境：高等学校を中心に」	高阪香津美 津田葵	『第6巻 言語の接触と混交 第1部 共生を紡ぐ日本社会』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006	99-135	2007
高阪香津美	「学知の還元ー調査報告を通して学ぶことー」	高阪香津美	『インターフェイスの人文学：2005年度<若手研究集合>報告書』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」	101-117	2006
高阪香津美	「在日ブラジル人の子どもたちが直面している現実ー母語による会話力調査を通してー」	高阪香津美	『インターフェイスの人文学：2005年度<若手研究集合>報告	297-311	2006

高阪香津美	「中部地方外国人集住地域における共生への歩みー交流のきっかけづくり」	津田葵・ 高阪香津美	『言語の接触と 混交 共生を拓 く日本社会』 大阪大学 21 世紀 COE プログラム 「インターフェ イスの人文学」	7-66	2006
高阪香津美	「共生を生きる日本社会:中国地方における学校の取り組みをめぐって」	高阪香津美 ・津田葵	『言語の接触と 混交 共生を生 きる日本社会』 大阪大学 21 世紀 COE プログラム 「インターフェ イスの人文学」	31-56	2005
高阪香津美	「日系ブラジル人の家庭をとりまく現状ーことばの問題を中心にー」	高阪香津美	『5. 言語の接触 と混交 日系ブ ラジル人の言語 の諸相』 大阪 大学 21 世紀 COE プログラム「イ ンターフェイス の人文学」	140-149	2003
佐藤久美子	「文学作品に何を読むかーバルトと共にラシーヌを読むー」	佐藤久美子	『愛知県立大学 外国語学部紀要 言語・文学編』	第 35 号	2003
竹越孝	「韓漢語言史資料研究概述ー語法詞彙部分」	竹越孝	『韓漢語言研 究』	489-506	2008

竹越孝	『語学漫歩選』		竹越孝編	古代文字資料館		2008
竹越孝	「史文と漢史文」(翻訳)		鄭光著、 竹越孝訳	『中国語学研究 開篇』	27, 83-107	2008
竹越孝	「韓漢語言史資料研究文献目録(稿)」(目録)		遠藤光暁、伊藤 英人、竹越孝、 更科慎一、曲曉 雲編	『韓漢語言研 究』	507-693	2008
竹越孝	「『至元譯語』・『蒙古譯語』の諸本について一部門と語彙の名称と 配列を中心に」		竹越孝	『語学教育フオ ーラム』	13, 115-123	2007
竹越孝	「論《老乞大》四種版本中所見的量詞演變」		竹越孝	『佐藤進教授還 暦記念中国語学 論集』	164-173	2007
竹越孝	『中国語のコーパス構築および近世中国語テキストの計量言語学的 研究』		竹越孝、 遠藤雅裕、 藤田益子	平成15-18年度 科学研究費補助 金研究成果報告 書		2007
竹越孝	『清代滿洲語文法書三種』(翻訳)		竹越孝編訳	古代文字資料館		2007
竹越孝	「華夷訳語関係文献目録」(目録)		遠藤光暁、竹越 孝、更科慎一、 馮蒸編	『語学教育フオ ーラム』	13, 197-228	2007
竹越孝	「辞書一ことばの万華鏡 中国語」(公開講座ビデオ映像)		竹越孝	「学びネットあ いち」学習ビデ オコンテンツ		2006
竹越孝	「『象院題語』の語彙と語法」		竹越孝	『中国語研究』	48, 1-14	2006
竹越孝	「『語学漫歩』のこと」		竹越孝	『TONGXUE』	32, 10-12	2006
竹越孝	「『象院題語』翻字」(資料)		竹越孝	『中国語学研究 開篇』	25, 63-72	2006

竹越孝	「『老朴集覽』と『翻譯老乞大・朴通事』の編纂順序」	竹越孝	『東ユーラシア言語研究』	1, 150-160	2006
竹越孝	「青海共和話音系簡介」	竹越孝	『愛知県立大学外国語学部紀要』言語・文学編	38, 349-370	2006
竹越孝	「朝鮮司訳院の漢学書『象院題語』について」	竹越孝	『汲古』	48, 44-49	2005
竹越孝	「今本系《老乞大》四本的異同點」	竹越孝	『韓國的中國語言學資料研究』	129-159	2005
竹越孝	「論介詞“着”的功能縮小—以《老乞大》、《朴通事》的修訂為例」	竹越孝	『中国語研究』	47, 20-34	2005
竹越孝	「談“却”的副詞化」	竹越孝	『中国語学研究開篇』	24, 156-165	2005
竹越孝	「中国語北方方言の通時的研究のために」（書評）	竹越孝	『東方』	285, 39-43	2004
長沼圭一	『プロダクション辞典』（第二版）	大賀正喜、兼子正勝、川竹英克、他（編）	小学館		2008
長沼圭一	「フランス語と英語における国籍を表す属詞について」	長沼圭一	『外国語教育論集』（筑波大学外国語センタ一）	第29号 139-147	2007
長沼圭一	《Les syntagmes nominaux sans déterminant en position attributive dans une phrase copulative : à propos de la fonction de description de rôle》	Keiichi NAGANUMA	『外国語教育論集』（筑波大学外国語センタ一）	第27号 107-116	2005
長沼圭一	『フランス語における有標の名詞限定の文法—普通名詞と固有名詞をめぐって—』	長沼圭一	早美出版社		2004



長沼圭一	「フランス語の無冠詞名詞文について—同格的表現との比較による考察—」	長沼圭一	『外国語教育論集』(筑波大学外国語センター)	第26号 165-173	2004
中村不二夫	論文「Not 後置型-ing 形の盛衰?助動詞 do の発達の隠れた側面 (3) CEFCs, Lampeter, Newdigate コーパスを根拠に」	中村不二夫	Mulberry (愛知県立大学英文学科)	57号, 63-98	2008
中村不二夫	論文「How do you? — 助動詞 do を用いない肯定疑問文に使われた動詞の収束 (下)」(リレー連載「英語史のなかの語彙拡散と収束」(5))	中村不二夫	『英語青年』(研究社)	153巻 第5号, 42-45	2007
中村不二夫	論文「How do you? — 助動詞 do を用いない肯定疑問文に使われた動詞の収束 (上)」(リレー連載「英語史のなかの語彙拡散と収束」(4))	中村不二夫	『英語青年』(研究社)	153巻 第4号, 42-45	2007
中村不二夫	論文「Not 後置型-ing 形の盛衰—助動詞 do の発達の隠れた側面 (1) 16-20 世紀日記・書簡資料を根拠に」	中村不二夫	『愛知県立大学文学部論集 (英文学科編)』	55号, 41-86	2007
中村不二夫	「辞書—ことばの万華鏡 英語 (ビデオ版)」(愛知県立大学公開講座「辞書—ことばの万華鏡」「英語」要約ビデオ映像)	中村不二夫	愛知県生涯学習情報システム「学びネットワークあいち」学習ビデオコンテンツ <a href="http://www.manabi.pref.aichi.jp/kouza/10026389/index_files/Default.htm">http://www.manabi.pref.aichi.jp/kouza/10026389/index_files/Default.htm</a>		2006
中村不二夫	雑誌記事「20 世紀英語の変化?時代の証言者としての英英辞書」	中村不二夫	『英語青年』(研究社)	152巻9号, 44-45	2006
人見明宏	「『代名詞的副詞』の統語範疇について」	人見明宏	『愛知県立大学外国語学部紀要』	第40号 303—	2008

人見明宏	基礎ドイツ語総合 I 「ドイツ語文法教科書」 (2008 年度用、PDF 版)	人見明宏	http://www.k5.dion.ne.jp/~ahitomi/	322	2008
人見明宏	基礎ドイツ語総合 I 「ドイツ語文法練習問題」 (2008 年度用、PDF 版)	人見明宏	http://www.k5.dion.ne.jp/~ahitomi/	1-29	2008
人見明宏	「依存関係文法における相関詞 es + 文肢文について」	人見明宏	『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』	第 39 号 325-341	2007
人見明宏	『独検 3 級突破』	室井禎之、 人見明宏	三修社		2005
人見明宏	『独検 4 級突破』	室井禎之、 人見明宏	三修社		2005
広瀬恵子	"University students' perceptions of peer feedback: An exploratory study"	広瀬恵子	『中部地区英語教育学会紀要』	37, 299-306	2008
広瀬恵子	"The author responds: Review of Product and process in the L1 and L2 writing of Japanese students of English"	広瀬恵子	Asian Journal of English Language Teaching	18, 201-204	2008
広瀬恵子	"Peer feedback in L2 English writing instruction"	広瀬恵子	JALT2007 Conference Proceedings	543-552	2008
広瀬恵子	"Japanese EFL students' perceptions of English writing instruction compared with their ideal views"	広瀬恵子	『三浦省五先生退職記念英語教育研究』	33-52.	2007
広瀬恵子	"Comparing organizational patterns of L1 and L2 opinion texts written by Japanese EFL students"	広瀬恵子	『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』	39, 41-73.	2007

広瀬恵子	「教育現場に根ざした英語ライティング研究を指して:英作文の指導と評価」	田中博晃・廣森友人・山西博之・広瀬恵子	『大学英语教育学会中国四国支部研究紀要』	4, 55-72.	2007
広瀬恵子	"Pursuing the complexity of the relationship between L1 and L2 writing"	広瀬恵子	Journal of Second Language Writing	15, 142-146	2006
広瀬恵子	Product and process in the L1 and L2 writing of Japanese students of English	広瀬恵子	溪水社	総ページ数 254	2005
堀田英夫	『多文化共生に資する特定領域スペイン語&ポルトガル語教育のための基礎研究 (医療分野)』	佐藤徳潤、堀田英夫、小池康弘、江澤照美他	平成19年度愛知県立大学教育研究活性化推進費事業報告書 http://www.for.aichi-pu.ac.jp/sp/Kaseika2007/	CDROM	2008
堀田英夫	「イニエス・フェルナンデス・オルドニエス:3人称の代名詞弱勢形のゆれ」(要訳及び著者紹介)	堀田英夫	『Lingüística Hispánica Anexo 4』(イグナシオ・ボスケ&ビオレタ・デモンテ編(1999)『スペイン語記述文法』章別和文要約 4)関西スペイン語学研究会	78-91	2008
堀田英夫	『スペイン語学小辞典』	坂東省次・堀田英夫編著 佐藤徳潤他	同学社		2007

堀田英夫	「海外とつながるスペイン語教室」	堀田英夫	『スペイン語世界のことばと文化 講演録 2006 年度』京都外国語大学イスパニア語学科	147-167	2007
堀田英夫	"Utilización de las nuevas tecnologías en la enseñanza del español"	堀田英夫	『遠隔通信と e-learning を組み込んだスペイン語教育用教材研究』	25-35	2007
堀田英夫	「グアテマラ・スペイン語の待遇形式」	堀田英夫	『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』	第 39 号 229-246	2007
堀田英夫	『遠隔通信と e-learning を組み込んだスペイン語教育用教材研究』	堀田英夫 糸魚川美樹 塚原信行	平成 17-18 年度科学研究費補助金研究成果報告書		2007
堀田英夫	『新感覚スペイン語のエッセンス』	堀田英夫 塚原信行 糸魚川美樹	朝日出版社		2007
堀田英夫	「辞書ーことばの万華鏡 スペイン語 (ビデオ版)」(愛知県立大学公開講座「辞書ーことばの万華鏡」 「スペイン語」要約ビデオ映像)	堀田英夫	愛知県生涯学習情報システム「学びネットあいち」 http://www.manabi.pref.aichi.jp/general/10027876/0/		2006
堀田英夫	『コミュニケーション重視の教育用標準スペイン語モデルの研究』	堀田英夫 田中敬一 小池康弘	平成 15-16 年度科学研究費補助金研究成果報告		2005

堀田英夫	「コミュニケーション能力養成授業シラバス」	堀田英夫	『コミュニケーション重視の教育用標準スペイン語モデルの研究』	109-125	2005
堀田英夫	「メキシコ・スペイン語の前置詞」	堀田英夫	『コミュニケーション重視の教育用標準スペイン語モデルの研究』	93-108	2005
堀田英夫	“Presente y futuro de la Asociación Japonesa de Hispanistas” 〈Primer Encuentro Internacional de Presidentes de Asociaciones de Hispanistas〉	堀田英夫	<a href="http://www.for.aichi-pu.ac.jp/hotta-hi/Pr esenteFuturoAJ H.pdf">http://www.for.aichi-pu.ac.jp/hotta-hi/Pr esenteFuturoAJ H.pdf</a>		2004
堀田英夫	「スペイン語文法項目別ドリル問題集 への文法等の解説」	堀田英夫	<a href="http://www.for.aichi-pu.ac.jp/hotta-hi/ej er/">http://www.for.aichi-pu.ac.jp/hotta-hi/ej er/</a>		2004
堀田英夫	「テレビ会議利用の外国語コミュニケーション教育」	堀田英夫	『2004PCカンファレンス論文集』CIEC:コンピュータ利用教育協議会	154-157	2004
堀田英夫	“Clase conjunta a distancia para el aprendizaje del español”	堀田英夫	JAPON Y EL MUNDO HISPANICO: ENLACES CULTURALES, LITERARIOS Y LINGÜÍSTICOS,	67-73	2004

堀田英夫	"Vocabulario fundamental del español estándar para su enseñanza como lengua extranjera"	堀田英夫	La Asociación Europea de Profesores de Español Actas del XIII Congreso Internacional de la Asociación de Lingüística y Filología de América Latina.	881-891	2004
堀田英夫	『スペイン語文法項目別ドリル問題集』 + 「教授用資料」	堀田英夫	朝日出版社		2004
松尾誠之	トーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆(4)』(翻訳)	丑田弘忍・ 精園修三・ 松尾誠之・他	『中京大学教養論叢』	第48巻 第4号 79-123	2008
松尾誠之	トーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆(3)』(翻訳)	丑田弘忍・ 精園修三・ 松尾誠之・他	『中京大学教養論叢』	第47巻 第4号 181-227	2007
松尾誠之	「14世紀シテリツィング(南チロル)証文研究 一関係文一」	松尾誠之	『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』	第39号 342-355	2007
松尾誠之	「辞書一ことばの万華鏡 ドイツ語」(公開講座ビデオ映像)	松尾誠之	「学びネットあいち」学習ビデオコンテンツ <a href="http://www.mana.bi.pref.aichi.jp/koouza/10026919/defaoltugon_files/Defaolt.htm">http://www.mana.bi.pref.aichi.jp/koouza/10026919/defaolt.htm</a>		2006

松尾誠之	トーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆(2)』(翻訳)	丑田弘忍・ 精園修三・ 松尾誠之・他	『中京大学教養 論叢』	第46巻 第4号 63-109	2006
松尾誠之	トーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆(1)』(翻訳)	丑田弘忍・ 精園修三・ 松尾誠之・他	『中京大学教養 論叢』	第45巻 第4号 99-142	2005
松尾誠之	トーマス・ムルナー『阿呆誠い(13)』(翻訳)	丑田弘忍・ 精園修三・ 松尾誠之・他	『中京大学教養 論叢』	第44巻 第4号 253-288	2004
松尾誠之	「14世紀シュテツイング(南チロル)証文研究 — 5枚のドイツ騎士団 証文 —」	松尾誠之	『愛知県立大学 外国語学部紀要 (言語・文学編)』	第36号 277-293	2004
松本三枝子	The Queen のイラス トレーションと物語性：19世紀イギリス女性雑誌 研究<2>	松本三枝子	『愛知県立大学 外国語学部紀 要』(言語・文 学編)	第40 号、 49-68頁	2008
松本三枝子	19世紀イギリス女性雑誌研究：The Queen(1861-63)<1>	松本三枝子	『愛知県立大学 外国語学部紀 要』(言語・文 学編)	第39 号、 75-95頁	2007
松本三枝子	絶妙のバランス感覚で女性読者を魅了した The Queen	松本三枝子	『イギリス女性 雑誌研究：19世 紀後期から20世 紀初頭まで』	1-14頁	2007
松本三枝子	犯罪者／犠牲者である謎の女：Isabel Vane/Vine in East Lynne	松本三枝子	『愛知県立大学 外国語学部紀 要』(言語・文 学編)	第37 号、 25-40頁	2005
松本三枝子	女性の神秘的な力：Margaret Oliphant の Phoebe Junior	松本三枝子	『愛知県立大学 外国語学部紀 要』(言語・文 学編)	第36 号、 17-36頁	2004



森田久司	The Relative Constructions and the Intervention Effect in Chinese	森田久司	『愛知県立大学 外国語学部紀要 言語・文学編』	第40号 69-91	2008
森田久司	日本人の知らない英語必須フレーズ 150	John BintLiff/ 森田久司	研究社		2007
森田久司	A Promotion Analysis of Japanese Relative Clauses	森田久司	English Linguistics	23: 113-136	2006
森田久司	The semantics of interrogative pronouns, existential (-like) quantifiers, and universal (-like) quantifiers in Japanese	森田久司	Journal of Japanese Linguistics	21: 21-41	2005
森田久司	The domain expansion mechanism of focus in Japanese and English	森田久司	『愛知県立大学 外国語学部紀要 言語・文学編』	第37号 41-67	2005
森田久司	Further evidence for pied-piping in Japanese, Korean, and Turkish	森田久司	MIT Working Papers in Linguistics	26: 346-361	2004

ことばの世界  
愛知県立大学高等言語教育研究所年報

2009(平成 21)年 3 月

愛知県立大学 高等言語教育研究所  
〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町熊張茨ヶ廻間 1522-3  
H 棟 3 階 H303 Tel:0561-64-1111(代表)  
内線 5303、Fax:0561-64-1107(外語)  
<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/gengoken/>

# ことばの世界

愛知県立大学高等言語教育研究所年報